

昭和四十二年度

財団法人

東洋文庫年報

東洋文庫

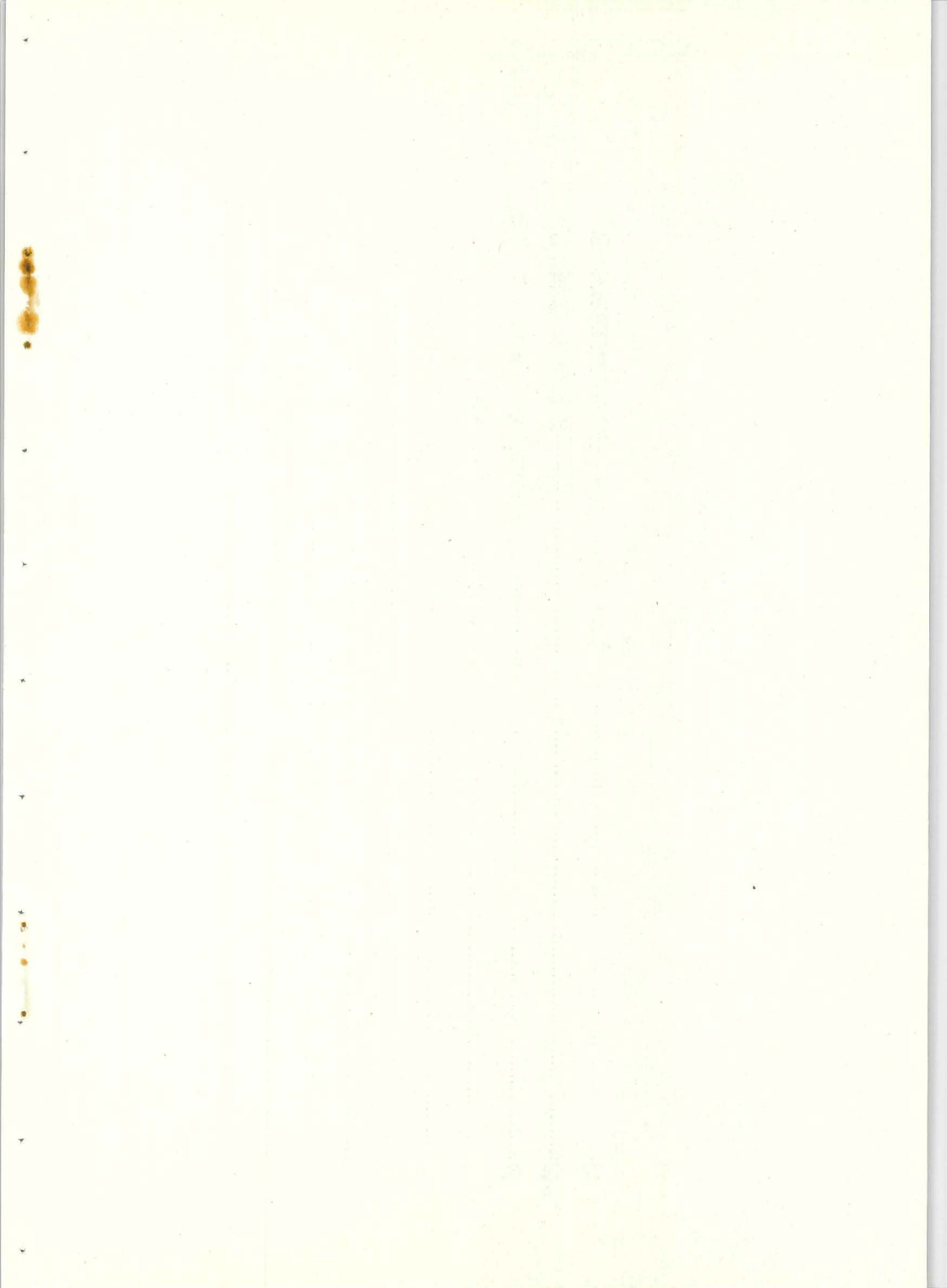
昭和四十二年東洋文庫年報

目次

一	東洋学センターとしての東洋文庫	1
二	昭和四十二年度に於ける東洋文庫	3
三	役員	6
四	事業	14
1	刊行図書	14
2	講演会(東洋学講座)	15
3	研究会(東洋文庫談話会)	17
4	展示会	18
5	情報連絡	20
6	図書の収集と閲覧	21
五	研究調査活動	29
1	東洋学連絡委員会	29
2	特定研究	30

3	機 関 研 究	32
4	総 合 研 究	33
5	各種研究委員会	34
	第一部 近代現代アジア研究	34
	近代中国研究委員会	34
	近代日本研究委員会	35
	第二部 東アジア研究	35
	東亜考古学研究委員会	35
	古代史研究会	35
	敦煌文献研究委員会	35
	宋史提要編纂協力委員会	36
	明代史研究委員会	37
	第三部 満蒙・朝鮮研究	37
	清代史研究委員会	37
	朝鮮研究委員会	38
	第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究	39

	中央アジア・イスラム研究委員会	39
	チベット研究委員会	39
	第五部 南アジア・インド研究	41
	南方史研究委員会	41
6	研究者養成	42
7	研究生報告概要	42
8	海外及び地方在住研究者の受入れ	46
9	職員の研究業績	46
附(一)	ユネスコ東アジア文化研究センター	62
(二)	東洋学術協会	74
(三)	東洋文庫蔵朝鮮善本マイクロフィルム目録(一)	77



一 東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）十一月に現在地に財団法人として設立されてから今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情の変動に応ずるため昭和二十三年（一九四八）図書部は国立国会図書館支部として、その管理を受けることとなり、別に日本政府から民間学術研究機関補助金が、また外国からの援助金が寄せられて、研究部にはその事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての機能を兼ね具えている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者に対して、マイクロフィルム等による資料複写サービスを行い、収蔵する貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取って、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行っている。(ホ)国内及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(ハ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日する海外のすぐれた東洋学者に講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行っている。(ニ)東洋学の特殊な専門分野の研究者を養成し、各大学の大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総合的研究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつつあるとき、従来からその方向を目指して活動してきた東洋文庫には、一層内外の期待がかけられているのが実情である。

二 昭和四十二年度における東洋文庫

本年は、今日の東洋文庫の母体となったモリソン文庫が日本へ移されてから、ちょうど五十年目にあたる。この半世紀の間に、蒐集の範圍をアジア全域に及び、蔵書数は何十倍かに増加した。と同時に研究活動も盛んに行なわれ、多くの成果を世に送り出している。今日、その発展拡大の途上にあつて五十周年を迎え、いまひとたび、過去の業績をふり返ることによつて、新しい発展を、全アジアの民族の文化所産と、その研究のすべてを包摂した東洋文庫及びそれらが充分に利用され得る東洋文庫への発展をはかるべく、創立五十周年記念特別事業を行なつた。その一は、東洋文庫五十周年展であり、他は、書庫及び研究室の増築である。

五十周年展は、読売新聞社と東急百貨店の協賛を得て、十月二十日から十一月一日まで、東急百貨店日本橋店グラウンド・ホールにおいて行なつた。日本書紀等国宝七点、重要文化財八点を含む約七百点を出陳し、連日平均二千人の參觀者で賑つた。十月二十四日には、皇太子殿下の御台臨を得、殿下は、榎事務理事の説明に予定時間を過ぎるまで御回覧遊ばされた。その他詳細については、十八頁「展示会」の項を参照されたい。

もう一つの記念事業である書庫及び研究室の増築は、予算規模三億円で、昭和四十二、三、四の三カ年で完成させる計画であるが、本四十二年度は、各界の御援助を得て約七千万円の補助金及び寄附金（財団法人日本船舶振興会よりの補助金三千万円、その他の寄附金約四千万円）が集まり、建坪約二二七平方メートル、延坪約一一三四平方メー

トル、鉄筋コンクリート地階附地上四階の書庫が建った。従来の東洋文庫の建物設備は大正十三年岩崎久弥氏によって設立されたもので、当時の技術の粋をつくし、貴重な図書を収蔵するにふさわしい堅牢さをもった清楚な建物である。今回の増築においても、その特質が生かされ、十二分に堅牢で外装も旧部分と同じ様式のものにした。書架の附設は四十三、四年度に行なう予定である。

さて、昭和四十二年度における東洋文庫の一般事業は、文部省大学学術局を通じての日本政府からの、また東洋文庫維持会から、補助金並びに援助金を受けて行なわれた。その主要なものは次の通りである。

文部省の補助金による四十二年度の事業のうち、出版物は、中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図Ⅲ」（論叢四八）があり、講演会は、「東洋学講座」を春秋二期公開した。春秋は、龍村美術織物研究所長龍村平蔵氏等五氏によって、東洋の工芸技術について技術者の立場から講演が行なわれ、秋期は、元東洋文庫主事石田幹之助氏等五氏によって、東洋文庫を含む五つの特殊文庫についての紹介が行なわれた。また各研究室は、それぞれの課題に従って、着々その成果を挙げており、研究会は、九回行なった。

文部省の補助金を得て購入した図書、あるいは、交換受贈により収集した文献は、単行本三、二九一点、定期刊行物二、四三五点、複写資料三四七齣、二五九枚。その他中央アジア特別文献資料として、単行本三五二冊、定期刊行物三一冊、複写資料二万一千齣を収集した。これらは「新着図書目録」および「洋書速報」に収録され、利用者の便に供している。

文部省科学研究費補助金による特別事業は、特定研究「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」の第二

年度に入り、機関研究「地方志にもとづく中国社会の研究」は、第三年度を終り、いわゆる北京善本の他、台湾及び日本国内の中国地方志がマイクロフィルムにより集められ、世界に現存する明代地方志は、その大半が東洋文庫に収蔵されることになった。総合研究「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」は第二年度に入った。

次代の中堅となるべき学徒を養成する研究生制度は、戦前より意を注いできたところであり、本年も文部省の補助金により、二名の新進学徒が研鑽に努め、着々その成果を挙げている。

当文庫は、海外研究機関との交流を盛んに行なっており、外国人研究者を多数受入れ便宜をはかり、また、当文庫から諸外国の研究機関を訪れて連絡を緊密にしている。本年は、辻直四郎文庫長が国際学士院連合第四一回総会及び委員会に出席し、六月一六日から七月一日までロンドン、オスロ、ストックホルム、コペンハーゲン、ハンブルグの各地を訪問した。また、山本達郎研究員は、第九回国際哲学人文科学協議会及び同委員会に出席し、九月一日から九月一七日まで、フランス、ルーマニア、インドを回ってきた。東洋文庫を訪れた外国人研究者は、プリンストン大学教授 B. Jansen 氏、カリフォルニア大学東洋図書館々長 Mock 女史、国立台湾大学文学院教授黃得時氏、韓国国史編纂委員会委員長金声均氏、大英博物館東洋書籍及写本部長 K. B. Gardner 氏、中華民国国立故宫博物館院長蔣復璁氏等である。その他数多くの外国人研究者が東洋文庫を利用して、研究を行なった。昭和四十二年六月二十五日、

東洋文庫評議員として永年文庫の発展に尽力された麒麟麦酒株式会社相談役株式会社明治屋会長磯野長藏氏が、また八月十七日、同、日本学士院会員京都大学名誉教授新村出氏が、十二月二十二日には同、協和醸酵工業株式会社取締役高橋龍太郎氏が永眠された。三氏の生前の文庫に対する御厚誼に厚く感謝すると共に深く哀悼の意を捧げる。

三 役 職 員

理 事 会 理 事 長 細 川 護 立 (文化財保護委員会委員)

專 務 理 事 榎 一 雄 (財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授)

理 事 有 光 次 郎 (東京家政大学・武蔵野美術大学学長)

岩 井 大 慧 (駒沢大学教授)

小 笠 原 光 雄 (株式会社三菱銀行相談役)

大 原 總 一 郎 (倉敷レイヨン株式会社社長)

川 北 禎 一 (株式会社日本興業銀行会長)

河 野 六 郎 (東京教育大学教授)

酒 井 杏 之 助 (株式会社第一銀行相談役)

高 垣 寅 次 郎 (財団法人日本學術振興会理事長 成城大学学長 日本学士院會員)

辻 直 四 郎 (国立国会図書館支部東洋文庫長 日本学士院會員 東京大学名誉教

授)

德 川 宗 敬 (神宮大宮司)

評議員会

監事
評議員

松方三郎 (株式会社国際テレビフィルム社長)

松本重治 (財団法人国際文化会館理事長)

山本達郎 (東京大学教授)

岡東浩 (東山農事株式会社専務取締役)

阿部賢一 (早稲田大学総長)

磯野長蔵 (昭和四十二年六月二十五日逝去)

梅原末治 (京都大学名誉教授)

奥田東 (京都大学学長)

大河内一男 (東京大学総長)

新村出 (昭和四十二年八月十七日逝去)

高橋龍太郎 (昭和四十二年十二月二十二日逝去)

永澤邦男 (慶応義塾大学塾長)

俣野健輔 (飯野海運株式会社取締役会長)

総務部

部長
参事
助手

小林吟重郎

平野豊 (ユネスコ東アジア文化研究センター会計兼務)

厚地麗子 小林和広 小林ゆき子 星野景子

図書部

技 能 員
作 業 員
部 長
司 書

三馬 勝利 (昭和四十二年五月退職)
中山 ミヨ (昭和四十二年十月退職)
山下 久代 (昭和四十二年十二月退職)
高橋 幸子 (昭和四十三年三月退職)
秋元 美恵子
臼倉 豊松 勝間 勇次郎 染谷 コウ
辻 直四郎
石黒 弥致 中島 正之 森岡 康 渡辺 兼庸
立花 孝全 (休職)

司 書 補
技 能 員

広瀬 洋子 谷 治 嘉紀
池田 直人 熊田 信次郎 児野 寿満子
堤 栄次郎 (昭和四十三年三月退職)

研究部

部 長
研究顧問

榎 一雄
岩井 大慧
岩村 忍
梅原 末治

東洋學連絡委員會委員

辻 直四郎

原 田 淑 人
(日本学士院會員)

村 田 治 郎
(京都大學名譽教授)

山 本 達 郎

板 野 長 八
(広島大學教授)

岩 井 大 慧

岩 生 成 一
(法政大學教授)

江 上 波 夫
(札幌大學教授)

榎 一 雄

貝 塚 茂 樹
(京都大學教授)

鈴 木 俊
(中央大學教授)

塚 本 善 隆
(京都國立博物館長)

辻 直四郎

長 尾 雅 人
(京都大學教授)

福 井 康 順
(早稻田大學教授)

松 本 信 廣
(慶応義塾大學教授)

宮崎 市定 (京都大学教授)

森 鹿三 (京都大学教授)

山本 達郎

吉川 幸次郎 (京都大学名誉教授)

名誉研究員

P・ドゥミエヴィユ (フランス学士院会員 前コレージュ・ド・フランス教授)

S・エリセーエフ (ソルボンヌ大学教授 元ハーヴァード・エンチン研究所長)

W・フックス (ケルン大学教授)

B・カルルグレン (前スウェーデン王立極東古代博物館長)

E・O・ライシャウアー (ハーヴァード大学教授 前ハーヴァード・エンチン研究所長)

W・サイモン (英国学士院会員 ロンドン大学アジア・フリカ研究学校名誉教授)

G・トゥツチ (ローマ大学教授 イタリア中東亜研究所長)

W・T・デ・バリイ (コロンビア大学教授)

A・フォン・ガベイン (ハンプルク大学名誉教授)

研究員(兼任)

青山 定雄 (中央大学教授)

荒 松雄 (東京大学東洋文化研究所教授)

市古 宙三 (お茶の水女子大学教授)

岩生成一（法政大学教授）

宇都本章（青山学院大学助教授）

梅原末治（京都大学名誉教授）

岡田英弘（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授）

亀井孝（一橋大学教授）

神田信夫（明治大学教授）

菊池英夫（山梨大学助教授）

北村甫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）

草野靖（日本女子大学助教授）

河野六郎

後藤均平（新潟大学助教授）

佐伯富（京都大学教授）

末松保和（学習院大学教授）

鈴木俊（中央大学教授）

周藤吉之（東洋大学教授）

関野雄（東京大学教授）

田川孝三	(東京大学専任講師)
田中時彦	(東海大学助教授)
田中正俊	(横浜市立大学助教授)
鶴見尚弘	(山梨県立女子短期大学助教授)
鳥海靖	(東京大学助教授)
中嶋敏	(東京教育大学教授)
坂野正高	(東京大学教授)
藤枝晃	(京都大学人文科学研究所助教授)
松本信廣	(慶応義塾大学教授)
松村潤	(日本大学助教授)
三根谷徹	(東京大学助教授)
宮坂宏	(専修大学専任講師)
村松祐次	(一橋大学教授)
護雅夫	(東京大学助教授)
山根幸夫	(東京女子大学教授)
山本達郎	(東京大学教授)

流動研究員 竺 沙 雅 章 (京都大学人文科学研究所助教授)

奨励研究生 丹 喬 二

研究室研究員 ケツン・サンポ ソナム・ギャーツォ

ツェリン・ドルマ (昭和四十二年八月帰国)

研 究 生 後 藤 明 西 義 郎

助 手 川 久 保 佐 恵 子 柴 田 邦 子 関 聡 恵

四 事 業

1 刊 行 図 書

○中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」(Ⅲ) 東洋文庫論叢第四十八 B4判 緒言五、凡例一、目次八、索引九

正誤表一、本文二〇八頁、昭和四二年六月

本書(Ⅲ)は、さきに公刊した第Ⅰ編(本論)及び第Ⅱ編(資料編)に対する図録編に当るものである。本書に収録した図録は、第Ⅰ編及び第Ⅱ編中に引用せられた資料中最も稀覯に属するものを選び、また(既に他に刊行せられているものは、それにより誰でも研究することが出来るから、それは避けるべく)未刊のものを多く採用した。本図録中に複製した古地図は大小七十点あり、その中の古版地図十三点(主としてパリの *Bibliothèque Nationale* 及びロンドンの *British Museum* の所蔵のもの)を除く五十七点は悉く手稿図であり、その中には同一アトラスまたは同一 *Portolano* より数個所を採用したり、または同一図の部分図の細部を示したもの等二十二点あり、これらを控除すれば三十五種の手稿図となる。これらは今日、主として西欧諸国に広く点在しているものであるが、著者は諸国に散在するそれらの原図を歴訪し、かつそれらの写真を入手し、本書に収録している。

○「Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (The Oriental Library)」No. 25 (東洋文庫欧文紀

要第二十五) B 5判 一四八頁 昭和四二年

Enoki, Kazuo : Dr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko. In Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Transfer of Dr. G. E. Morrison Library to Baron Hisaya Iwasaki (1917-1967)

Sekino, Takeshi: New Researches on the Leis-su

Tsuji, Naoshirō : Notes on the Rājasūya-section (IX. 1.) of the Mānava-śrautasūtra, continued

○「東洋文庫五十周年展」(展示目録) B 5判 六四頁 図版八頁 挿図一 昭和四二年一〇月

○「東洋文庫新着図書目録(和書・中国書・朝鮮書)」15 一九六六年四月〜一九六七年三月 B 5判(油印)七一頁 昭和四二年五月

○「東洋文庫年報(昭和四一年度)」 A 5判 一一八頁 昭和四二年一二月

2 講演会 (昭和四十二年東洋学講座)

春 期

第二〇七回 五月十七日

「高昌国・隋・日本の錦」

龍村美術織物研究所長 龍村 平 蔵

第二〇八回 五月二十四日

「漆芸と技法」

日本芸術院会員 松 田 権 六

第二〇九回 五月三十一日

「鑄造法のさまざま」

文化財専門審議委員 香取正彦

第二一〇回 六月七日

「藍と紅のそめもの」

染織作家 松原利男

第二一一回 六月十四日

「中国の古印」

日展評議員 小林斗盞

秋期

第二一二回 十月十八日

「モリソンと東洋文庫——モリソン文庫五十周年を迎えて——」

国学院大学教授・元東洋文庫主事 石田幹之助

第二一三回 十月二十五日

「東北大学狩野文庫について」

東北大学附属図書館古典目録編纂主任 矢島玄亮

第二一四回 十一月一日

「慶応義塾大学斯道文庫について」

慶応義塾大学教授 阿部隆一

第二一五回 十一月八日

「静嘉堂文庫陸心源旧蔵本について」

静嘉堂文庫長 米山寅太郎

第二一六回 十一月十五日

「天理図書館錦屋文庫について」

天理大学教授 木村 三四吾

3 研究会 (東洋文庫談話会)

昭和四十二年四月八日 「典座教訓」

石田 正憲

昭和四十二年五月二十日 「釜山倭館史料の成立と伝存」

研究生 長 正統

昭和四十二年六月三日 「『皇輿全覽図』について」

埼玉大学教授 矢 沢 利彦

昭和四十二年七月八日 「バリ島のヒンドゥー教について」

東京大学大学院生 森 弘之

昭和四十二年九月三十日 「方臘の乱について」

奨励研究生 丹 喬二

昭和四十二年十一月二十五日 「蘇東坡論」

京都大学助教授 流動研究員 竺 沙雅章

昭和四十二年十二月十六日 「各国の図書館・古文書館」

お茶の水女子大助教授 和田 久徳

昭和四十三年一月十日 「マホメット伝研究の最近の動向」

研究生 後 藤 明

昭和四十三年二月七日 「清朝における八旗制度の展開」

一ノ関工業高等専門学校助教授 内地研究員 細谷 良夫

4 展 示 会

第五十三回展示会

東洋文庫五十周年展

会 期 自 昭和四十二年十月二十日（金）

午前十時至午後六時

至 昭和四十二年十一月一日（水）

会 場 東急百貨店日本橋店グランドホール

主 催 財団法人東洋文庫

読売新聞社・同ブッククラブ

後 援 文化財保護委員会

東京都教育委員会

展示内容

緒論

展示会趣旨、東洋文庫について、モリソン氏について、岩崎氏について

特別陳列

国宝・重要文化財 十五点

東洋博物誌

江戸文化

中国と東アジア諸民族の書籍

ヨーロッパ人の見た日本

ヨーロッパ人の見た中国

拓本

中国風俗画

銅版画

地図

日本人の新中国旅行記

以上約六百点の書籍等が展示され、一日約二千人位の参観者でにぎわった。なお一般公開に先だって、左記の通り開会式を行なった。

日時 十月二十日 午前十一時より

会場 東急百貨店日本橋店グラントホール

開会式次第

主催者挨拶

東洋文庫長 辻直四郎

読売新聞社常務取締役 橋本道淳

来賓祝辞

文部大臣

鈴木 亨弘 代理・政務次官 谷川 和穂

国立国会図書館長

河野 義克

駐日オーストラリア大使

アレン・ブラウン 代理・文化参事官 ノーマン・バートレット

テープカット

アレン・ブラウン夫人 代理・ノーマン・バートレット夫人

参会者 約六十名

十月二十四日（火）には皇太子殿下の御台臨があり、榎専務理事の御説明で、午前九時三十分より同十時十七分まで会場を御覧遊ばされた。

5 情報連絡

本年度事業は左記の通りである。

一、内外の大学カレンダーの蒐集

二、東洋文庫刊行物の欧文要旨作成

三、内外の東洋学に関する情報提供、通信連絡

四、来日外国入学者への便宜供与

6 図書の収集と閲覧

一、資料の収集

購入・受贈・交換の手段を通して資料の収集につとめ、近代東アジアを中心とするアジア全域の研究調査資料図書館として、今日の要求に応えうる機能の充実を目標に資料の収集をはかった。今年度は一般文献資料の他、特に中央アジア特別文献資料収集計画の二年目として、中央アジア関係の欧文・現地語の研究文献資料の収集に心がけた。本年度末現在の蔵書数は五一五九九〇冊である。

本年度に購入・交換等で受入れた資料の総数は次の通りである。

資料購入

区分		数量
単行本	三二九冊	
定期刊行物	一〇三冊	
複写資料	三四七齣 二五九枚	

資料交換

区分	受		贈		寄		
	和漢書	洋書	計		国内	国外	計
単行本	一、二九四冊	一、六六八冊	二、九六二冊		二三八冊	九四冊	三三二冊
定期刊行物	一、四五二冊 (新聞二種)	八八一冊	二、三三二冊 (新聞二種)		三二八冊	一一一冊	一、五三九冊
計	二、七四五冊	二、五四九冊	五、二九四冊		五六六冊	一、三〇五冊	一、八七一冊

なお、このための選択図書カードは千枚、収集図書事務用カードは二四九二枚、通信連絡三一〇件であった。

二、資料の整理

a 洋書目録室

本年度新収増加図書の分類カード一二〇〇点を作成した。

その他モリソン収集のパンフレットのうち、主として China Proper のカード四五五〇枚を調査し作成した。この外にも数多くの冊子があったが、モリソン文庫がシナから輸送されて深川の倉庫に荷上げされた大正六年九月に猛烈な台風に襲われ、その高潮により水中に没したためにアート紙が膠着し一枚の板のように変質して了ったものは己むなく今回廃棄せざるを得なかった。

b 和漢書目録室

収集図書は漢籍五〇四部一八二六冊・一八九葉、カード数二二三一枚、和書四三六部五八一冊・二枚、カード数二五八二枚の整理を行なった。

今年度受贈図書の内特記すべきものに、近代中国研究センター購入の線装本一括資料がある。

c アジア文献目録

本年度譲受（購入、受贈）図書総冊数は、一、二九〇冊、使用言語は、十一ヶ国語である。

此の内、特記すべきものに、製本冊数九七三冊（実数一、四六五冊）より成る、タイ文献の大コレクションがある。

これはタイ国在住の松田商会主、松田嘉久氏より、在タイ日本大使館、外務省を介して、東洋文庫へ寄贈されたタイ貨十万バート相当の、タイ文献の第一回到着分で、文献の選択、購入、発送には、外務事務官秋山光路、石井米雄の両氏が当った。

コレクションは

- 1 チャラット氏旧蔵本
- 2 タイ国法律集成
- 3 頒布本 (Crenation volume)
- 4 Kurusapha (文部省外郭組織) 刊行の叢書
- 5 一般新刊書

より成り、内容は文学、史学、宗教、政治、伝記、旅行記、語学等の各領域にまたがり、特に文学、史学部門のもの

は、その重要既刊文献の七割を尽している。

この外、クウェート及サウデイ・アラビヤより寄贈の、宗教書を中心としたアラビヤ文献がある。

d その他

本年度新たに登録した和・漢・洋の単行本及び逐次刊行物の総数は五一七二冊である。

また目錄カード複製は、事務用、閲覧室用を含めて八九五二枚作成された。

e 製本

本年度製本室で施工した圖書の冊数は、単行本一二冊、定期刊行物六九九冊、複写資料の製本三二〇冊、製帙二三六であった。モリソン氏収集のパンフレット類は、従来一冊ごとに分類番号をつけ、十五—三十冊ずつまとめて箱に収めて排架されていたが、長い間の紛失を防ぐ為に、原則として函架番号順に十五冊ずつを合せて製本した。大きさはB5判、A4判、B3判の三種、装幀は本クロースを使用し、背に

MORRISON
PAMPHLETS

P—III—a

1
15

CHINA

1

の如く、分類及び函架番号と、存否が一見で判るように全体の通し番号を入れた。
三、蔵書目錄等の編集と刊行

本年度刊行した目錄は次の五種である。

a A catalogue of the periodicals in foreign languages in the Toyo Bunko, acquired during the years 1917—1966.

東洋文庫創立以来の欧文雑誌類はモリソン文庫時代より通算して専門書のみでも千五百種におよぶ、この中には廃刊書も相当にあるが、今回全部を網羅して、国立国会図書館より刊行した。

b 洋書速報 二六一号（一九六七・四・一）—二八六号（一九六八・三・一五）

国立国会図書館の刊行であるが、毎月の十五日号に東洋文庫収集の洋書が速報された。

c 新着図書目録 十六号 一九六八年五月刊

東洋文庫が前年度内に収集した和・漢・朝鮮刊行の単行本、定期刊行物と一括受贈された図書の内容を明らかにした年報である。

d 「東洋文庫五十周年展」目録

モリソン文庫が日本に移されてから五十年になることを記念して、十月二十日から十一月一日まで東急百貨店日本橋店で開催された展覧会の目録で、国宝・重要文化財十五点をはじめ、モリソン博士とモリソン文庫、岩崎久弥氏と東洋文庫、東洋博物誌、江戸文化、東アジアの書籍、アジアの言語、ヨーロッパ人の見た中国、ヨーロッパ人の見た日本、拓本、風俗画、銅版画、地図の各部にわたる解説である。

本年度編集した目録は次の二種がある。

a 東洋文庫漢籍分類目録 史部

東洋学文献センター連絡協議会から前年に刊行した「集部」に続いて、本年は「史部」の編集を行なった。
b 藤井文庫目録

近代医学の基礎的文献を網羅した。藤井尚久博士旧蔵の医書約一千五百部の目録で、明年度国立国会図書館より刊行予定のものである。

四、閲覧

本年度における開館日数は二八六日、閲覧人員は四六九四人、一日平均約一六人、利用図書数は七三五五冊、一日平均約二五七冊であった。

なお、これを表に示すと次のとおりである。

月	開館 日数	閲覧者数	一日 平均	昨年同月 との比 (△印は減)	閲覧図書数	一日 平均	昨年同月 との比 (△印は減)
	日	人	人	人	冊	冊	冊
4	23	257	12	△ 35	3,920	171	△ 83
5	24	322	13	△ 33	4,845	202	306
6	26	358	14	35	4,062	156	△ 1,878
7	25	477	19	1	6,437	245	△ 2,137
8	26	482	19	△ 105	8,314	320	△ 6,081
9	24	455	19	8	6,773	282	24
10	24	474	20	3	7,564	315	△ 1,039
11	22	506	23	168	7,480	340	△ 301
12	22	474	22	32	9,089	313	2,971
1	21	287	14	2	4,935	235	1,468
2	24	300	13	38	4,234	177	679
3	25	302	12	6	5,902	236	△ 1,197
計	286	4,694			73,555		

昭和四十二年度 図書閲覧状況

月	和 書		漢 籍		洋 書		合 計	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
4	71	233	540	3,403	188	284	799	4,920
5	208	345	1,006	4,177	210	323	1,424	4,845
6	202	414	444	3,329	196	316	842	4,062
7	288	470	720	5,627	246	340	804	6,437
8	351	681	861	7,133	207	500	1,419	8,314
9	318	716	803	5,723	159	337	1,280	6,773
10	301	192	850	6,987	184	384	1,335	7,564
11	409	885	764	6,239	195	354	1,368	7,480
12	286	431	1,111	8,386	181	272	1,578	9,089
1	248	567	436	4,180	105	188	789	4,935
2	252	719	338	3,202	142	313	732	4,234
3	281	1,064	444	4,447	174	391	899	5,902

閲覧図書数 内 訳

五、サービス

1 資料複写サービス

本年度において処理した複写数量は左記のとおりである。
写真複写

申込件数 六一二件

撮影齣数 九七、二九七齣

焼付引伸枚数 四一、五九二枚

ポジ呷数 一一、三八三呷

リファレンス 四〇〇件

ゼロックス複写

申込件数 八九三件

撮影枚数 二五、七八四枚

五 研究調査活動

1 東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からその研究事業に国際的規模の実績をあげてきており、さらにいま、東洋学研究総合センターとして広範な研究者の共同利用と一般公開性を具え、研究者に対する便宜供与を行ない、専門分野に於ける国内及び国際的連絡の中心としての役割を果たすことを広く期待されている。従ってその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依頼して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画に関する助言をうけている。

昭和四十二年度の委員会は左の如く行なわれた。

前期（昭和四十二年十月十四日）

報告 昭和四十二年度研究事業中間報告

議事 昭和四十三年研究事業計画案について

後期（昭和四十三年三月十九日）

報告 昭和四十二年度研究事業報告

議事 昭和四十二年度研究事業計画案について

その他

2 特 定 研 究

課題「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」

研究担当者 榎 一雄

研究協力者 有馬成甫 生田 滋 市古宙三 岩生成一 岩崎富久男 衛藤藩吉 神田信夫 北村 甫 河野六郎

佐々木正哉 鈴木 俊 田川孝三 田中時彦 田中正俊 鳥海 靖 沼田次郎 坂野正高 松村 潤 護 雅夫

安岡昭男 山根幸夫 山本達郎 箭内健次

〔研究目的〕 日本の近代化はアジア史あるいは世界史上からも注目を惹く現象とされるが、その過程は中国・朝鮮をはじめとする東アジア諸国の近代化過程と不可分のかかわりあいをもつ。然るに従来の研究は主として内発的国内過程か外交史的関係に注目するに止り、世界各国特にアジア諸国の近代化との構造的相互連関において理解しようとする試みが不充分であった。東洋文庫は特に次の三点に重点をおいた研究を行なう。(1)日本及びアジア諸国の近代化の契機は、十六世紀にはじまり十九世紀に特に顕著となった欧米諸国のアジアへの進出と植民地的支配体制の確立である。アジア諸国はかかる衝撃に対する対決を余儀なくされることによって近代化への契機をつかんだ。従来充分かでないこの欧米の進出過程をアジア史の立場から具体的に究明する。(2)アジア諸国は時期に差こそあれこの欧米の進

出に対する対応を契機として様々な過程と態様とを以て、近代化に踏み出した。日本近代化の独自性と特殊性を明かにする比較的研究及び日本の近代化とアジア諸国の近代化との構造的関連を究明する。(3)日本の近代化に対して加えられる様々の国際的評価は以上の諸点を照らし出す重要な意味を含むと同時に各国の近代化のそれぞれの段階をふまえている。従って欧米諸国・アジア諸国の評価を比較検討することは各国と我国との段階的質的相違の把握に有効な作業である。

〔研究経過の概要〕 東洋文庫は、旧開国百年記念事業会収集資料と戦前の欧文日本研究書の蒐集を擁し、ユネスコの国際協力研究「東アジア地域における西洋文明受容の歴史的背景」を担当し、諸大学間の共同利用研究センターとしての役割を果たしてきた。

従来テーマに関連して東洋文庫において出された成果に次の如きものがある。

「欧文日本研究書目」(一九四五～一九六〇)の刊行

“A Selected List of Books on Japan in Western Languages (1945~'60)” (A studies on Asia Abroad I)
The Information Centre of Asian Studies, 1964. pp. 74. Toyo Bunko.

「東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録—和漢・マイクロフィルムの部—」第一～第三分冊の刊行 昭和三六～三八年

本特定研究の本年度(第二年度)においては、主要な研究課題を「アジア諸国における近代化過程の特質の比較的研究」とし、その研究に必要な資料および参考図書を収集整理した。このほか、昭和四十一年度の主要課題「近代

化を契機としての欧米諸国のアジアへの進出」の研究を継続し、また昭和四十三年度の研究課題「日本の近代化に対する国際的評価」の準備をした。

3 機関研究

課題「地方志にもとづく中国社会の研究」

研究代表者 田川孝三

研究分担者 (書誌的調査並びに目録の作成) 田川孝三 榎 一雄 青山定雄 藤枝 晃 宇都木章 (近世中国

における鄉村支配層の存在形態に関する研究) 市古宙三 田中正俊 佐々木正哉 神田信夫 松村 潤 (税役制

度の地方的・歴史的相違に関する研究) 佐伯 富 菊池英夫 草野 靖 鶴見尚弘 山根幸夫

〔研究目的〕 中国史研究の基本史料を豊富に含んでいる歴代地方志を体系的に蒐集・整理し、これを基礎として書誌・社会・財政三班を組織し、近世中国社会の基礎構造を研究する。わが国にも多数の中国地方志が存在するが、旧北平図書館所蔵の善本にして、久しくアメリカ議会図書館に保管されていた、いわゆる北京善本のマイクロ・フィルムを購入して、本研究に役立てるとともに、わが国の研究者にも利用できるようにする。

〔研究経過の概要〕 北京善本のマイクロ・フィルムの中から、昭和四十年、四十一年度に引伸ばしたものを除き、本研究に必要な史料(文集・政書・地方志など)のプリントを行なった。そのほか、台湾の中央研究院歴史語言研究所の所蔵に係る地方志十四点、および内閣文庫所蔵の明代地方志、国会図書館(旧上野図書館)所蔵の地方志につい

ても、東洋文庫に収蔵されていないものは、それぞれプリントを作成した。この結果、世界に現存する明代地方志はその大半が東洋文庫に収蔵されることになった。これらすべての地方志目録は、おつて刊行する予定である。

4 総合研究

課題「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」

研究代表者 末松保和

研究分担者 末松保和 田川孝三 河野六郎 武田幸男 後藤均平 西田守夫 松村 潤 岡田英弘 村山正雄

森岡 康 長 正統 榎本杜人 杉山信三

文部省科学研究費の助成により、昭和四十一年度から着手したこの総合研究は、本年が第二年目になり、前年度に着手した各種調査・研究を継続する一方、本年度の新企画をもくわえて、大略つぎの調査・研究活動をおこなった。

(1) 楽浪関係史料の調査・整理

楽浪関係史料のうち銘文のあるものの調査をおこない、本年度中に総計五百数十点の調査を完了した。内訳は鏡、瓦、漆器、錢貨、封泥、印など各種ある。

(2) 高句麗広開土王碑文の調査・研究

この碑文拓本の調査は前年度から着手していたが本年度は東京国立博物館の収蔵史料のなかに原石を撮影した乾板が数枚あることを発見し、痛みのはなはだしかった同乾板の修補再生に成功し、今後の研究のためのまことに

有益な史料とすることができた。

(3) 大清皇帝聖德碑の解説・校訂

本碑文の満・蒙文、漢文両方の拓本写真を入手して、従来の解説の補正、校訂の作業を進行させた。

このほか李朝時代の金石文史料の調査研究も各種の新史料を得て着々進んでいるが、その詳細は省略する。

5 各種研究委員会

第一部 近代現代アジア研究

近代中国研究委員会

(1) 出版

解放日報記事目録 II 一九六七年一〇月 B 5 二九六頁

近代中国研究センター彙報 9 一九六七年七月 B 5 三二頁

“ “ 10 一九六七年一〇月 B 5 三二頁

(2) 収集図書

和漢書 中国文 六六九点、日本文 三八〇点、漢籍 二一点。

洋書 一八〇点

近代日本研究委員会

主として特定研究「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」の研究運営を担当し、とくに「アジア諸国における近代化過程の特質」を課題とし、アジア諸国の近代化の過程を国別に検討するとともに、その成果を日本近代化の過程と比較考察して、日本近代化の持つ特質を明白にした。

第二部 東アジア研究

東亜考古学研究

昨年に引き続き梅原末治氏の寄贈にかかる「梅原考古資料」日本関係の資料を年代順に大別し、各時代ごとに遺物遺跡、地域等により検索出来る様に整理分類をつづけて行なった。

古代史研究会

西周金文（西周金文辞大系）講読会を開き、言語、経学、考古、歴史等の諸方面からする解説研究を行なっている。

敦煌文献研究委員会

前年度からの継続事業として、国内国外に現存する西域出土古文獻、古文書の所在調査・複製写真の収集・整理、及び内外の諸機関並びに研究者の要望にしたがって収集資料の公開・複写サービス等をおこなった。

特に本年度は、東ベルリンアカデミー所蔵ル・コック蒐集吐魯番漢文文献の焼付写真（一六二葉）及びパリ国立図書館所蔵・ペリオ蒐集敦煌文献の焼付写真（B5判、一二六〇葉）を入手し、さらに大英博物館の好意により、「スタン・敦煌文献断簡 (Stein Documents and Fragments)」(S・六九八一～七〇〇四、S・九一三四、S・九一三八～九一七二、計三〇齣) のボジ・フィルム、及び焼付写真 (S・一一二八二、四葉) の寄贈をうけ、その整理にあった。また石塚晴通、土肥義和によって故浜田徳海氏蒐集敦煌文献の調査をおこなった。

一方、前年度に引きつづき、『西域出土漢文文献分類目録 非仏教文献之部 III』の編纂をおこない、典籍類の一部（道教文献・文学・教育文献）の草稿をほぼ完成した。分担者は吉岡義豊、金岡照光の二人である。

なお、本年度は京都大学人文科学研究所助教授笹沙雅章氏が流動研究として来庫し、共同研究課題「敦煌文献に基づく中国文化の総合的研究」に参画した。

宋代史研究委員会

宋代史研究の国際協力事業の一つとして先に原稿を完成した「宋代史年表」の北宋篇を刊行した。これは政治、社会経済、文化の各方面にわたる主要事項を豊富に盛ったものである。

また「宋人伝記索引」は字、籍貫、生卒年、年齢まで記載した詳しいものをクラッケ教授の御幹旋により、A. C. L. S. Committee から出版補助を得て四十二年度にかけて刊行中である。

一方「宋会要輯稿」食貨の部の要項及び語彙索引の作成は前年度に引きつづき、毎月一回研究会を開いてすすめて

おり、現在かなり進捗している。

宋代研究文献速報は昭和三十三年第一号を作成以来、年とともに好評を得て居り、年四回作成配布して内外の宋代史研究者の便に供している。

明代史研究委員会

前年度からの継続事業として、引続き明清社会経済語彙の語彙解をつくる作業をつづけている。分担者は岩見宏、田中正俊、鶴見尚弘、山根幸夫の四人である。

また、明初の基本史料である『大語三編』『大語武臣』『教民榜文』および『大明令』の輪読会を隔週ごとにもった。『大語』四種については、人名索引を作成する予定である。

第三部 満蒙・朝鮮研究

清代史研究委員会

(1) 「清太宗実録校定本の作成」 清太宗実録には、その原初形態を伝えるものとして、江戸時代に我が国に伝来した三種の康熙本清三朝実録がある。すなわち内閣文庫所蔵本、国会図書館所蔵本、京都大学人文科学研究所蔵本がこれである。またさらにこれらの写本として東京大学教養学部所蔵本、東洋文庫所蔵本が知られているが、従来これら我が国現存のテキストを調査してきたが、本年度においてはシナ写本である内閣文庫本を底本として、他本との異同

を註する作業を行ない、天聰年間の部分については一応校定を終了した。

(2)「満文老檔註釈篇の作成」一九六六年八月における第三回「台湾における満蒙の言語及び文献の実地調査」の際故宮博物院で行った満文原檔二冊の調査の結果の整理にあたった。

なお、昭和四十二年九月から二月まで、一関工専助教教授細谷良夫氏が内地留学研究員として来庫し、当研究室において八旗制度の研究を行った。

朝鮮研究委員会

本研究委員会の調査・研究は河野六郎、田川孝三の両名が中心となって、年度計画を合議立案し、その結果、つぎのような仕事を実施した。

(1)朝鮮金石史料の調査研究

これは文部省、総合研究「金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究」の一環として行なったものである（内容については三三～三四頁（総合研究）参照）。

(2)東洋文庫収集マイクロフィルムのなかの朝鮮本の調査・研究。

当文庫が、さきに機関研究として収集した朝鮮本マイクロフィルムにつき前年に引きつづき、基礎的調査、解説目録の作製を行なった（この仕事は専ら田川孝三が担当した）。

(3)日鮮関係史々料の調査・研究

当文庫の研究者養成計画の一環として、長正統をして、この調査・研究を行なわしめた（内容については、長正統「日鮮関係における記録の時代」（東洋学報第五十巻四号、昭和四三年三月、七〇―一二四頁）参照。

第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム研究委員会

本年度から始めた「中央アジア特別文献資料の収集・整理・情報提供計画」にもとづき、中央アジアに関する各国語資料の収集にあたった。また、イスタンブールのトプカプ博物館図書館その他に所蔵のオスマン朝史料のマイクロ・フィルムを若干購入した。なお、護研究員は、アジア・アフリカ言語文化研究所のイスラム化研究組織の兼任研究員として、本文庫収集の資料により、オスマン朝史の研究にあたった。

チベット研究委員会

昭和三十六年度より、インドから招聘したチベット人学者の協力を得て「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・宗教・文化の総合的研究」を続けて来たが、昭和三十九年度からは重点を文部省補助金による特別調査研究「チベット歴史事典の編集」に置いた。昭和四十二年度における研究の進行状況は次のようである。

1 チベット歴史事典の編集

担当 山口瑞鳳、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ

前年度に編集資料はほぼ整備されたが、新たにニンマ派、カルマ・カギユ派、サキヤ派関係文献を調査し、事典の項目、記述を追加、補訂した。

2 古代・中世チベット史の重要文献の研究

担当 山口瑞鳳、立川武蔵、小川一乗

土觀著「トゥムタ」*grub mtha'*の「カーダム派」「ゲルク派」の章、敦煌出土チベット文書等の研究が進行中である。

3 歴代ダライ・ラマ、パンチエン・ラマの伝記の研究

担当 山口瑞鳳

ダライ・ラマ一、二世、パンチエン・ラマ一世の伝記の研究を終了した。

4 現代チベット語の記述的研究

担当 北村甫、湯川恭敏、西義郎、星実千代、ツエリン・ドウーマ、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ、ロプサン

前年度に引続きヤクテ方言の調査、ラサ方言録音資料（会話、物語）の文字化と分析、現代文語の研究を行なったほか、アムド方言の基礎語彙を調査し、「チベット語の発音と文字」の原稿を作成した。

5 日本に現存するチベット文献目録の編集

担当 ケツン・サンボ

東洋文庫マイクロ・フィルム所蔵・大英博物館所蔵敦煌出土チベット文書、東洋文庫所蔵蔵外チベット文獻の目録の草稿を作成した。

6 チベット文獻の収集

ニシマ派關係文獻、インドより新たに出版されたチベット語出版物（七十八点）を購入した。

7 講読会の開催

「新テプテル・マルボ」 *Deb ther dmarpo gcar ma* について、チベット人を中心に毎週一回講読会を開催した。

第五部 南アジア・インド研究

南方史研究委員会

共同研究としては毎週金曜日に「琉球歴代宝案」の講読研究会を開き、また共同作業としては東南アジア・インド關係の資料蒐集のための調査を行なった。しかし、研究者の個々の研究テーマに隔りがあるため、重点は共同研究よりはむしろ個別的な研究に置かれており、各研究の発表会を随時もつことにしている。今後、中央アジア、イスラム・チベット研究室との連絡を一層密に行きたい。

6 研究者養成

従来、わが国においては、東南アジア・チベット・インド・イスラム圏及び中央アジア・満蒙など特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的な資料の収集も充分でなく、その研究の持つ意義の重要性にもかかわらず甚だ立ち遅れていた。東洋文庫は、戦前よりこれら諸地域の現地語資料の収集につとめ、またこれら特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するために研究生の制度を設けていたが、戦後に到り特にこうした未開拓分野の振興を目的として、文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外についても、日本学術振興会より補助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、後継研究者の養成が行なわれてきた。文部省及び日本学術振興会補助金等による本年度の研究生は左記の通りである。

イスラム研究 後藤 明「マホメット時代のアラブ社会の考察」

ビルマ研究 西 義郎「現代ビルマ語の書記体系と現代ビルマ語の助詞類について」

中国研究 丹 喬二「宋代農村社会の研究」

7 研究生報告概要

「マホメット時代のアラブ社会の考察」

後藤 明

マホメット、その人個人の思想、行動については、既に十九世紀中頃より主として西欧の学者の手で無数の研究が発表されており、今日、史料的な制約のため、それに付け加えるべきことはほとんどない。しかし、彼が思索し行動していたその環境について——むろん自然のそれでなく、当時の人々が形づくっていた人間関係のそれについての研究は、今世紀のなかばを過ぎてはじめて、本格的に着手されたにすぎない。私はアラブ文化のなかで異常に発達した伝記学の成果に依って、マホメット時代のアラブ社会にあった種々な組織原理の追求を試み、あわせて、マホメット自らが創りだした彼の権力のその基盤となったものを探ろうとした。

「現代ビルマ語の書記体系と現代ビルマ語の助詞類について」

西 義郎

ビルマ語の書記体系——文字上の諸要素を組合せた単位と音韻上の諸要素を組合せた単位の対応関係の記述と定義しておく——の総合的な記述としては、R. B. Jones and U. Khin, *The Burmese Writing System* (1957) しかない。しかもその記述は、(1)単音節語に限るといって良く、多音節語に就いては、所謂軽声音節と促音に終る音節以外の音節に続く音節に見られるサンデイの文字上の音節と関連した記述に限られている、(2) Jones の挙げている文字上の音節の尾部は、実際に現代ビルマ文語に見られる尾部の全てを尽していない、(3)文字上の音節と音韻上の音節の不規則な対応に就いて——不規則であることを前提としても、ある程度規則化して記述出来るものもある——は、いくつかの例を挙げるに留まっている、といった欠陥が指摘出来る。

更に、書記体系の記述が、音韻体系の記述との対応においてなされるとすれば、当然、現代ビルマ語の音韻体系の

問題もここに含まれることになる。現代ビルマ語の音韻体系に関しては、L. E. Armstrong, W. S. Cornyn, 西田竜雄、M. Haas (Jones, R. A. Miller などは Haas に従う), R. I. MacDavid, R. K. Sprigg, D. Bernot の諸氏による記述があり、音韻解釈の点は、兎も角として主として語頭子音、核母音の Cluster Analysis、声調の解釈などの点に解釈の相違があらわれている——音声観察の面では、いずれも略々一致している。(この事は、各研究者の使用した情報提供者の出身地が中央ビルマ方言の話される各地に及んでいるにも拘らず、音韻的には、極めて統一されていることを示めす。然し各語に就いてみると発音は一樣でないことも多い。書記体系を取り上げる時は、このことが大いに問題となる。) しかし、(1) 軽声音節を間にした一連の子音群などについては、観察と解釈も一樣でない、(2) いずれも現代ビルマ語(アラカン・タヴォイなどの諸方言と対比して中央方言と呼んでも良いだろう。) 内の方言差に就いては、充分考慮されていない嫌いがある、(3) 可能な全ての音韻上の音節を尽していない、などといった点が気付かれる。

書記体系を記述しようとするなら、各語の発音に就いて、若し標準的なものを定めることが出来れば、それとの関係において、若しそれが出来ないならば、出来る限り、中央方言内の発音の Variants を挙げておくことが望ましい。この様な諸点を考慮に入れて、ビルマ語の書記体系の記述を試みた。

次にビルマ語の文法体系において、助詞の果す役割は、日本語の助詞の場合に劣らず重要である。これまでに現代ビルマ語の助詞に就いての総合的な記述としては、J. A. Stewart, W. S. Cornyn, minn Latt, 原田正春の諸氏によるものがある。この他動詞節 (verbal syntagma) に現われる助詞類 (final verb particles, verb particles, 一部

auxiliary verbs) に関する可成り精密な研究として A. J. Allot の論文がある。しかし、いずれも(1)取扱う助詞について網羅的でない、(2)機能の記述が不正確か、単純化しすぎている、(3)意味の記述が、最後の論文の場合を除いて厳密でなく、体系化されていないといった欠陥を示している。更に助詞の定義・分類も互に異っている。この様な諸点を考慮に入れ、現代ビルマ語の助詞の記述を試みたい。

「宋代農村社会の研究」

丹 喬二

佃戸・自作農といった小農民の具体的な存在形態を解明するための一作業として、小農民と国家権力との関係を探るべく「戸」についての検討を行なった。それによって「戸」というのは「家」であることが明らかになった。すなわち家というのは直接的な血のつながりと財を同じくする家族からなる一つの生活単位であり、戸というのはそれを国家権力が上からとらえたものである。このようにたてまえとしてはそして普通には戸と家とは同じものであるが、それがずれる場合がある。それらが詭名挟戸、相冒合戸などであり、これらは法律上禁止されていた。

当時、郷村内には田産を所有する地主・自作農のほかに、田産を持たないものが少なからず存在した。彼らの大部分は佃戸として地主から土地を借りて耕作し、残りのものは何らかの業次を経営して生計をたてていたが、彼らはいずれも家を構成し、それによって国家から独立の戸として把握され、その税役を直接に負担するとともに、災害の際には賑恤の対象とされていた。すなわち立戸の条件は決して田産所有などにあるのではなく、佃戸をはじめとする土地を持たないものを含めたあらゆる家族(農業を基幹とする何らかの生計をたてている)がつまり家が全て戸として

把握されるたてまえになっていたのである。

以上のような主旨の論文を、「戸に関する一考察―主戸客戸制研究の前提―」としてまとめた。

8 海外及び地方在住研究者の受入れ

東洋文庫の主要な特色の一つは、総合的研究機関としての研究センターの機能を具えている点にある。その研究体制は、流動的共同利用的である点に特色があり、東洋学連絡委員会制度、研究員制度及び研究者養成制度を採用して一研究機関の枠を越えた総合的かつ流動的共同研究を行っており、さらに日本学術振興会及びハーバード・エンチン研究所等よりの補助金によって海外及び地方在住研究者を受入れて研究者の調査・研究活動に便宜を提供している。本年度の日本学術振興会補助金による流動研究員及び内地研究員は左記の通りである。

流動研究員 笠沙雅章（京都大学人文科学研究所助教授）〔共同研究課題〕「敦煌文献に基づく中国文化の総合的研究」
内地研究員 細谷良夫（一ノ関工業専門高等学校助教授）〔研究課題〕「清朝社会経済史」 細谷良夫氏は神田信

夫教授の指導により満州語の習得・満州語史料の解読及び史料の閲覧を行なった。

9 職員の研究業績

青 山 定 雄

〔論文〕「宋代における江西出身の高官の婚姻関係」（聖心論叢第二十九集 昭和四二年六月）

荒 松 雄

〔論文〕「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリの遺跡について」(東洋文化研究所紀要第四四冊)

石田幹之助

〔著 書〕『増訂長安の春』(「東洋文庫」第九一、平凡社、昭和四二年五月)

『大唐の春』(「大世界史」第四、田中克己氏と分担執筆、昭和四二年九月)

〔講演〕「最近シナで発見された西方諸国の貨幣に就いて」(日本考古学協会総会、昭和四一年四月三〇日)

『人生読本』(NHK放送、昭和四二年八月二、二二、二三)

〔学界動向〕「欧米に於ける『史記』の研究」(「中国古典文学大系」第十「史記」上巻月報、平凡社、昭和四三年二月)

〔書評紹介〕「海外学界消息 第三十二、三十三、三十四、三十五」(「東方学」第三十二、三十五輯、昭和四一、四三年一

月)

「心に残った本(ラヴィスの「ヨーロッパ政治史概観」のこと)」(朝日新聞昭和四二年一月二四日、第

二部)

〔評論雑記〕「新村先生のこと」(日本古書通信第三二巻第一一号、昭和四二年一月一五日)

「李賀」(「漢詩大系」月報、集英社、昭和四二年一月)

「私の一冊」(毎日新聞昭和四二年九月一七日 日曜版)

「幸運な発見」(朝日新聞「研究ノート」欄、昭和四三年二月二九日夕刊)

市川健二郎

〔論文〕

- 「桑原先生の学風その他」(『桑原隲藏全集』第一卷「東洋史説苑」月報、昭和四三年二月)
- 「白鳥先生の広く知られざる研究」(東洋学講座講演要旨「東洋文庫年報四十一年度」所収、昭和四二年二月)
- 「上田万年先生を語る」(座談会筆記「銀座百点」昭和四三年二月号)
- 「読む」と「詠む」と」(「短歌」昭和四一年二月)
- 「子供と正月」(中央公論昭和四一年四月号)
- 「キサトウスの『日本諸島実記と西洋刊行最古の日本地図』正誤と補遺」(ビブリア第三三三号、昭和四一年一〇月)

〔講演〕

- 「華僑の親族構造」(民族学研究第三二卷三号、一九六七年十二月、二二三—二四頁)
- 「モリソン文庫蔵東南アジア史料の重要性」(東洋学報第五〇卷二号、一九六七年九月、一一六—一二頁)
- 「華僑と中国本土」(民族学研究第三二卷三号、一九六七年十二月、二二七—二三頁)
- 「十九世紀におけるタイ社会の変質」(東南アジア史学会研究会、一九六七年五月)
- 「タイ国社会の比較近代化」(特定研究「日本の近代化」合同研究会、一九六七年十二月)
- 「海外研究情報ⅡとⅢ」(東南アジア史学会会報三号和五号、一九六七年六月と十二月)
- 「国内研究情報Ⅰ」(東南アジア史学会会報六号、一九六八年三月、五一—八頁)

〔書評紹介〕

- H. J. Benda and J. A. Larkin, ed., *The World of Southeast Asia*, 1967, 331 pp. (東洋学報第五

○卷四号 一九六八年三月

〔英 訳〕 Yoshito Harada, (Supplement) Chinese Dress and Personal Ornaments in the Han and Six Dynasties. Sept., 1967.

〔雑 記〕 「東と西のタイ研究者達」 (在バンコック日本人会会報、一九六八年度)

岩 生 成 一

〔論 文〕 「江戸幕府の代官平野藤次郎」 (法政大学文学部紀要第一三三号、昭和四三年三月)

「独医 Kaempfer の『日本誌』とその日本思想界に及ぼした影響」 (日本学士院紀要第二五卷第一号、昭和四二年六月)

「最後のポルトガル船」 (キリスト教史学第一二集、昭和四二年十二月)

岩 崎 富 久 男

〔編 書〕 『中国農村における二つの道の闘争』 (現代中国語会話教室、昭和四二年十二月)

〔翻 訳〕 「徐寅生『弁証法でピンポンを打つ』」 (亜東社「七億人民の根性」所収、昭和四二年六月)

「王国藩『すっかんびん』精神万歳!」、『勤勉節約して、協同組合にとりくもう』、李凱等『五億農民の方向』、『階級闘争によって発展の一途をたどる』、上海社会科学院歴史研究所『農村に資本主義の復活をはかった中国のフルシチョフの罪行を清算する』 (中国農村における二つの道の闘争) 所収、昭和四二年十二月)

梅 原 末 治

〔論 文〕「韓国出土의 吳越王錢俶의 塔」(韓国、考古と美術八ノ四)

「伝慶州出土의 蓮華紋鏡」(同誌八ノ五)

「故宮博物院院の饗饗銅勺」(故宮季刊一ノ四)

「玻璃の勾玉」(古美術二〇)

「周代の古鏡」(東方学三五)

「多鈕細紋鏡の再検討」(朝鮮学報四六)

「越前大石村出土の銅鐸の絵画」(金岡博士古稀記念『日本民族と南方文化』所掲)

〔講演〕「韓国考古学の調査研究についての管見」(韓国高麗大学亜細亜研究所講演、一九六七年四月二三日、於同大
学)

「戦国時代の古鏡」(台北故宮博物院講演、一九六七年一〇月二日、於同院)

「上古に於ける日鮮の文化交流」(京都読史会大会特別講演、一九六七年一月四日)

「殷代の古銅器と彫像」(一九六七年一月一〇日、東方学会創立二十年記念第十七回会員総会講演)

榎 一 雄

〔編 書〕『A Survey of Bibliographies in Western Languages concerning East and Southeast Asian

Studies,』(The Centre for East Asian Cultural Studies, Bibliographies, No. 4) Toyo Bunko, 1967, pp.

iv+227 (In collaboration with Prof. Dr. Tokihiko Tanaka)

〔論文〕

「アジア地域におけるドキュメンテーション活動の諸問題―東アジアにおける人文社会科学部門を中心として―」(学術月報第二十卷二号、昭和四二年五月、二八―三三頁)

「法願の通過した鄰善国について」(東方学第三四輯、昭和四二年六月、一二―三二頁)

「Dr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko. In Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Transfer of Dr. G. E. Morrison Library to Baron Hisaya Iwasaki (1917―1967)」

(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 25 (1967), pp. 1―57. Also Reprinted edition with The List of the Toyo Bunko Publications, pp. 1―xxix.)

「A Identidade dos Yüeh-shih com os Citas. Uma Hipótese.」(Anais do I Colóquio Brasil-Japão (25―27 de Julho de 1966. Redigido e organizado pelo Prof. Eurépedes Simões de Paula.) São Paulo-Brasil, 1967, pp. 75―84)

〔概説〕

「東亜近代化運動の展開・中華民国の成立と発展・新しいアジア建設運動」(日本女子大学通信教育、世界史、昭和四二年五月三〇日発行増補第三版 一九七―二〇七、二九三―三〇五、三〇六―三二六頁)

〔講演〕

「アジアにおける文化交流」(昭和四二年一月二二日、於日本女子大学)

「英国に滞在して」(昭和四三年二月一三日、於明倫高等女学校(横浜))

〔雑記〕

「石田幹之助著『増訂長安の春』解説」(「増訂長安の春」、東京、平凡社刊、昭和四二年五月、三三一―三四

四頁

「日本の東洋学―東洋文庫五十周年展に寄せて」（読売新聞、昭和四二年一〇月二五日夕刊第七頁）

「蘇峰堂の春―高野静子さんの御母堂を偲んで」（静香、昭和四二年一〇月一五日塩崎彦一氏刊、一二―一五頁）

「シルクロードの現実」（「日本をみつめるために」（日本女子大学教養特別講義第一集、続）昭和四二年三月二〇日刊、五一―六〇頁）

「アジアにおける文化交流」（「日本をみつめるために」（日本女子大学教養特別講義第二集）、昭和四三年一月二〇日刊、三三三―三四六頁）

「アジアにおける文化交流」（女子大通信、二三〇号、昭和四三年三月、一九―二二頁）

「魏志東夷伝」（NHKラジオ学校放送（教師生徒共同、高等学校、一学期、昭和四三年四月八日―七月二〇日、二七頁）

神田 信夫

〔講演〕「満文原檔と老檔」（第四回若手アルタイ学・中央アジア研究者集会 昭和四二年七月一日）

「清初の満州族社会の諸問題」（東大東洋文化研究所研究会 昭和四二年一〇月二六日）

〔学界動向〕「一九六六年の歴史学界―回顧と展望―東洋史（満州・蒙古）」（史学雑誌第七六編第五号 昭和四二年五月）

菊池英夫

〔論文〕「太湖周辺の旧地主庄園 その二」(山梨大学教育学部研究報告第一八号、昭和四二年)

〔文化大革命における『文化』問題〕(中国研究月報二四〇号、昭和四三年二月)

〔講演〕「文化大革命における『文化』の問題」(於中国研究所講座、昭和四二年六月一四日)

〔評論雜記〕「中国の歴史博物館」(東洋学報第五〇卷第一号、昭和四二年六月)

佐伯富

〔論文〕「Economie et absolutisme dans la Chine moderne: le cas des marchands de sel de Yangchow.

(Revue Historique, Juillet-Septembre 1967)

末松保和

〔報告〕「世宗朝という時代」(朝鮮学会大会にて 昭和四二年一〇月七日)

周藤吉之

〔論文〕「王安石の新法とその史的意義—農民政策を中心として—」(仁井田陞博士追悼論文集第一卷『前近代アジア

アの法と社会』、昭和四二年一〇月、三一五—三三四頁)

「北宋における提挙在京諸司庫務司と提点在京倉草場所の興廢」(白山史学一四、昭和四三年三月、二二五—五〇頁)

「宋代浙西地方の囲田の發展補論」(東洋大学大学院紀要四、昭和四三年三月、四三—五六頁)

立花孝全

〔論文〕「Atisa における大悲および淨戒」(印度学仏教学研究第一六卷二号、昭和四三年三月)

田中時彦

〔編著〕共編「A Survey of Bibliographies in Western languages concerning East and Southeast Asian Studies」(ユネスコ東アジア文化研究センター、一九六六年三月 二二七頁)

〔論文〕「日本近代化研究の動向と問題点」(行動科学研究四)

〔講演〕「Japan's Modernization and the Introduction of Railways」(第二七回国際東洋学者会議)

〔学会動向・報告〕「日本近代化研究の方法論討議のために」(東洋文庫日本近代化研究プロジェクト研究会)

「平塚市の政治的状况」(「第三一回衆議院総選挙投票行動の実態調査報告」所収)

〔書評〕R. Spandling: 「Imperial Japan's Higher Civil Service Examinations」(Japan Quarterly, Vol.

XV, No. 2, April-June 1968)

田中正俊

〔共著〕『教養人の東洋史』(下)(社会思想社『現代教養文庫』、昭和四一年三月)、小島晋治・新島淳良・三木亘・

石田保昭氏と共著。

〔編著〕『歴史像再構成の課題——歴史学の方法とアジア——』(御茶の水書房、昭和四一年一月)、幼方直吉・遠

山茂樹氏と共編。

〔文〕

「歴史事実の認識と評価」(『歴史評論』一八九号、「シンポジウム・歴史学をいかに学ぶか——東京大学歴史学研究会発足に際して」、昭和四一年五月、五一—一三頁)

「アジア研究における感性と論理」(幼方・遠山・田中編『歴史像再構成の課題——歴史学の方法とアジア——』、御茶の水書房、昭和四一年一月、二五—二九九頁)

「清仏戦争と日本人の中国観」(『思想』五一二号、昭和四二年二月、一四—三四頁)

「西欧資本主義と旧中国社会の解体——『ミツチエル報告書』をめぐって——」(仁井田陞博士追悼論文集・第一巻『前近代アジアの法と社会』、勁草書房、昭和四二年一〇月、三一—六六頁)

「アジア社会停滞論批判の方法論的反省——巖中平著・依田憲家訳『中国近代産業発達史』によせて——」(『歴史評論』二〇四—二〇六号、昭和四二年八—一〇月、六二—六六、六三—六九、六五—七二頁)

〔講演〕

「歴史的事実と歴史的内容」(横浜市立大学新入生歓迎会、昭和四〇年四月一五日)

「歴史の現実と歴史学」(横浜国立大学経済学部ゼミナール委員会講演会「社会科学を学ぶ者のために」、昭和四〇年六月二三日)

「歴史事実の認識と評価」(東京大学歴史学研究会発足記念シンポジウム「歴史を如何に学ぶべきか——現代における我々の課題として——」、昭和四〇年九月二五日)

「『ミツチエル報告書』をめぐって」(東京大学東洋文化研究所研究会、昭和四一年四月二八日)

「アジアの『近代化』と西洋資本主義」(横浜市立大学公開講座、昭和四一年九月二八日)

〔論 文〕

「世界史における近代——中国の近代化をめぐる——」〔歴史評論〕研究会、昭和四一年二月一〇日）

「現代歴史学の方法論的反省——アジア社会停滞論をめぐる——」〔東京大学歴史学研究会、昭和四二年四月二七日）

「西洋資本主義と中国農民の綿業——ミツチェルとデンビーの所説を通じて——」〔東京大学東洋史談話会、昭和四二年五月一三日）、（東洋文庫中国中世史研究会、昭和四二年一〇月二日）。

「民族教育をめぐる——日本人の意識とアジア研究」〔横浜市立大学、昭和四二年六月二三日）

「近代中国農民の階級規定について」〔早稲田大学第一四回早稲田祭シンポジウム「アジア史研究の課題」、昭和四二年十一月三日）

「ケーシン・ダールビアをめぐる（その二）」〔鈴木学術財団研究年報三、昭和四二年、二九～三四頁）

「故 Louis Renou 博士（一八九六～一九六六）主要著作目録（暫定）」〔東洋学報第四九卷第四号、昭和四二年三月、一〇～三三頁）

「Louis Renou 教授の業績を偲ぶ」〔日仏文化二二、昭和四三年、一五～一九頁）

「In memoriam Louis Renou(1896-1966).」〔Mélanges d'Indanisme à la mémoire de Louis Renou, 1968, pp. ix-xii.)

「In the formation of the Adbhuta-Brahmana」〔Annals of Bhandarkar Or. Res. Inst. 48/49, 1968.

pp. 171-178.)

鶴見尚弘

〔論文〕「国立国会図書館所蔵康熙十五年丈量の長洲県魚鱗冊一本について」(『山崎先生退官記念東洋史学論集』)

鳥海靖

〔論文〕「鉄道敷設法成立に至る鉄道期成同盟会の压力活動」(『東京大学教養学部人文科学学科紀要』第四三輯 歴史学研究報告 第十三集「歴史と文化」IX 一九六七年八月)

「初期議会の政争」(家永三郎ほか編「近代日本の争点」中 一九六七年十一月 毎日新聞社)

「翼賛政治体制の成立」(『日本史のしおり』第二号 一九六八年二月)

〔研究動向〕Recent trend of the Studies on "modernization of Japan" ("Acta Asiatica" No. 13 Nov. 1967)

原田淑人

〔著書〕「増補漢六朝の服飾」(『東洋文庫論叢』四十九、昭和四十二年九月三〇日)

〔論文〕「史海片帆(一) 魏志倭人伝から見た古代日中貿易」(『聖心女子大学論叢』二九、昭和四十二年六月一五日)

「史海片帆(二) 周官考工記の性格とその製作年代について」(『聖心女子大学論叢』三〇、昭和四十二年一月一五日)

「六朝磚墓壁刻画竹林七賢図について」(月刊文化財九月号、昭和四十二年九月一日)

坂野 正高

〔編 著〕「中国をめぐる国際政治——影像と現実——」(衛藤藩吉氏と共編、東京大学出版会、昭和四三年三月)

〔論 文〕「同治年間(一八六二—一八七四)の条約論議」(東洋文化四二)

「中国と英国の外交官はどのように見ていたか——マカートニー使節の派遣から辛亥革命まで——」
(前掲の衛藤氏との共編「中国をめぐる国際政治」所収)

藤 枝 晃

〔論 文〕「文字の生い立ち」 3—13 (未完、日本美術工芸三四三—三五四、内三四八号休載、昭和四二年四月—四三年

三月)

(3 饗養の背面、4 皇帝の文字、5 木簡、居延筆、6 政治の文字、7 印章、8 絹、9 紙の出現、10 卷子本、11 楷書、12 古文書、13 冊子本、折本、木筆)

「敦煌木筆觀音經」(墨美一七七、昭和四三年三月)

〔講 演〕「Buddhist Caves in the typical Tang Style at Tun-huang」(XXVII International Congress of

Orientalists, 昭和四二年八月—一七日)

「Sino-Tibetan Buddhist Monument of Chü-yung kuan」(東ベルリン・フンボルト大学、昭和四二年九月二〇日)

九月二〇日)

「同題」(コペンハーゲン大学、昭和四二年九月二六日)

「敦煌の唐武窟」(内陸アジア史学会、第八回大会、昭和四二年一月一日、於中大会館)

「マクロ学会とミクロ学会」(読売新聞、昭和四二年九月)

「天理図書館への熱情」(Daiko Ruger 中正善君追悼特別号、昭和四二年二月二八日)

「アメリカの美術館博物のぞき」(一)(三)(談交二二卷一〜五号、昭和四三年一〜三月)

「大阪文化にオアシス——石浜純太郎先生をいたむ」(読売新聞、昭和四三年二月二日)

「三つの学恩」(『桑原隲藏全集』第一卷月報、昭和四三年二月)

村松祐次

「論文」清の内務府荘園——内務府造送皇産地畝冊という史料について——(一橋大学年報「経済学研究」一

二)

「報告」中華人民共和国訪問の記(読売新聞、一九六七年四月、七回掲載)

護雅夫

「著書」『游牧騎馬民族国家——「蒼き狼」の子孫たち——』(講談社、昭和四二年六月、二一〇頁)

『絹の道と香料の島』(共著、文芸春秋社、昭和四三年二月、一一一八頁)

〔論 文〕

「ソ連の宗教、とくにイスラーム教について」 (『大法輪』、昭和四二年五月、一五五—一六一頁)

「突厥の国家構造」 (『歴史教育』、一五ノ五・六合併号、昭和四二年六月、一二—一七頁)

「ふたたびウイグル文消費貸借文書について」 (仁井田陞博士追悼論文集第一卷『前近代アジアの法と社会』、

昭和四二年一〇月、二三—二六頁)

「イスラーム世界近代化の歩み」 (『講座 東洋思想』七、昭和四二年二月、一二七—一七六頁)

「トルコの思想家——自由主義の父ナーームク・ケマル」 (『講座 東洋思想』七、昭和四二年二月、二三

六—二六六頁)

〔講 演〕

「日本の仏教行事と民俗」 (仏教文化研究会文化講座、昭和四二年五月二七日)

「ソ連の宗教」 (十方会文化講座、昭和四二年六月二七日)

「ソビエトの宗教政策について」 (仏教文化研究会文化講座、昭和四三年三月三〇日)

〔学界動向〕

「東洋史総説」 (『史学雑誌』七六—五、昭和四二年五月、一八四—一八九頁)

「レニングラードにおけるアルタイ学」 (『歴史教育』、一五—九・一〇合併号、昭和四二年一〇月、一〇三

—一〇九頁)

〔書評紹介〕

「西田竜雄著『西夏文字』」 (『東京大学新聞』、昭和四二年四月一七日)

「江上波夫著『騎馬民族国家——日本古代史へのアプローチ——』」 (『サンケイ新聞』、昭和四二年一二月七日)

〔評論雜記〕

『小林行雄著『女王国の出現』』（『週刊読書人』、昭和四三年一月二九日）

『江上波夫著『騎馬民族国家』』（『朝日ジャーナル』、昭和四三年二月四日、七七—七九頁）

『トルコ人のユーモア』（『世界の文学』月報、昭和四二年六月）

『他山の石——スーフイズムについて——』（『東京本願寺報』、昭和四二年一〇月五日）

『毛利元就・チンギス汗・吐谷渾』（『朝日新聞』、昭和四三年一月一六日）

山 根 幸 夫

〔編 書〕

『皇明制書下巻』（解題・校勘）（古典研究会 B5判五六四頁、昭和四二年四月）

『清国行政法索引解説』（株式会社大安 A5判一〇八頁、昭和四二年一月）

〔論 文〕

『華北の廟会——山東省を中心として——』（史論一七、昭和四二年三月）

〔学界動向〕

『孫文と近代日本』（東京女子大学論集一八一、昭和四二年九月）

〔雑 記〕

『日本のキリスト者と朝鮮』（東京女子大学報二〇—五、昭和四二年五月）

〔書 評〕

『安徽省図書館編『安徽文献書目』』（東洋学報五〇—一、昭和四二年六月）

『上海図書館編『徐家匯藏書樓所藏地方志目錄初稿』』（東洋学報五〇—二、昭和四二年九月）

(附一) 東洋文庫附置 ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能と実績とを高く評価するユネスコの要望によって、昭和三十六年七月一日に東洋文庫の附置機関として設立された。

ユネスコは一九五七年以来、向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The Major Project on the Mutual Appreciation of Eastern and Western Cultural Values)を推進して来たが、この目的遂行に恒久的に協力する施設 (associated institutions) として、まず一九六一—六二年度に東アジア(ビルマ以東)各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がベイルート、ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置されつつある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の総合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果たしてきた東洋文庫に、これを附置することにした。

一 目 的

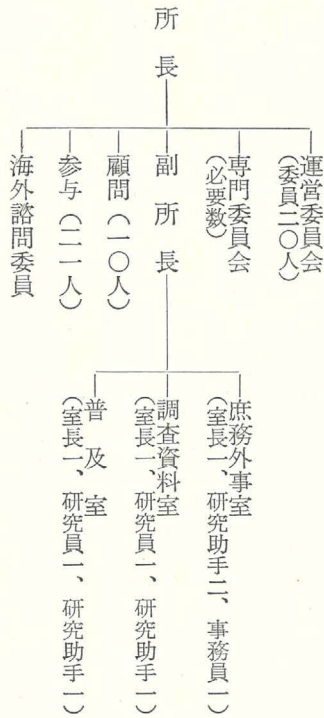
東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ビルマ以東)地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

(人文科学・社会科学)の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリ
アリング・ハウスとしての機能を發揮することを目的とする。

二 経 費

当センターの経費は政府補助金およびユネスコ援助金によって賄われる。

三 機 構



四 役員及所員

所 長

辻 直四郎

運 營 委 員

一 又 正 雄

岩 生 成 一

岩 村 忍

岡 野 澄

小 倉 武 一

尾 高 邦 雄

川 野 重 任

渋谷 敬 三

菅 沼 潔

高 橋 幸 八 郎

竹 内 理 三

田 中 一 松

中 村 元

服 部 四 郎

福 井 康 順

前 田 陽 一

松 本 信 広

藪 内 清

山 本 達 郎

吉 川 幸 次 郎

顧 問

朝 吹 三 吉

大 浜 信 泉

金 田 一 京 助

高 垣 寅 次 郎

東 畑 精 一

原 田 淑 人

久 松 潜 一

前 田 充 明

宮 沢 俊 義 (一名欠員)

参 与

青 山 秀 夫

石 田 英 一 郎

石 田 幹 之 助

岩 井 大 慧

岩 淵 悦 太 郎

織 田 武 雄

海 後 宗 臣

鈴 木 俊

田 村 実 造

都 留 重 人

殿 木 圭 一

長 尾 雅 人

平 塚 益 德

米 花 稔

丸 山 真 男

三 上 次 男

水 野 清 一

宮 崎 市 定

宮 本 正 尊 (二名欠員)

所 員

副 所 長 榎 一 雄

専門員 J. R. McEwan

所員 生田 滋 岩崎 富久男 大塚 祐子 竹之内 信子 秩父 良子

外池 明江 直井 靖夫 山崎 元一

松前 義治 (東洋文庫総務部参事兼務)

市川 健二郎 (昭和四十三年三月退職)

五 運 営

運営委員会 (委員二〇名) は事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議 (顧問一〇名) は所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六 事 業

センターの行なう事業の主なるものは左の通りである。

- 1 国際的協力による調査研究
- 2 内外研究機関との連絡および情報資料の交換
- 3 東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換
- 4 上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究*」(センター機関誌、季刊)の刊行

5 東アジア文化研究に関する諸資料の刊行*

(イ) 内外研究機関及び研究者一覧

(ロ) 各種の文献目録類

6 東アジア文化の研究成果の普及*

(イ) 研究書・概説書の出版

(ロ) 非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行

7 東アジア文化に関する、東アジア地域外（主としてヨーロッパ）に保存されている史料の調査

8 内外学者の研究に対する便宜供与

9 フェローシップの企画および斡旋

10 研究会・講習会の開催

11 国際会議・シンポジウムの開催

12 その他センターの目的達成に必要な事業

* 刊行物はすべて英文である。

七 昭和四十二年度事業概況

I 運営委員会及び顧問会議

1 運営委員会

第一回 〔日時〕 昭和四二年一〇月一四日（土） 午後一時～三時

〔出席者〕 四名（委任状一〇名）

〔報告〕 昭和四一年度事業報告及び決算報告について

〔議題〕 (1) 昭和四二年度事業計画及び予算案について

(2) 昭和四三年度概算要求について

(3) 一九六九―七〇年度ユネスコ事業計画に対する提案について（特に中央アジア研究について）

(4) 委員の改選について

第二回 〔日時〕 昭和四三年三月一九日（火） 午後一時三〇分～三時

〔出席者〕 七名（委任状一三名）

〔報告〕 (1) 昭和四二年度事業中間報告

(2) 昭和四三年度文部省よりの補助金について

〔議題〕 (1) 昭和四三年度事業計画概要

(2) 昭和四四年度概算要求、一九六九―一九七〇年度予算要求について
(3) 人事について

2 顧問会議

〔日時〕 昭和四二年一〇月一四日（土） 午後一時～三時

〔出席者〕 ○名（委任状五名）

〔報告〕 (1) 昭和四一年度事業報告及び決算報告について

(2) 昭和四二年度事業計画及び予算案について

(3) 昭和四三年度概算要求について

(4) 委員の改選について

〔議題〕 一九六九―七〇年度ユネスコ事業計画案に対する提案について（特に中央アジア研究につ

いて）

II 調査研究

1 調査研究（A）

「東アジア諸国における人権思想の発達」

調査専門委員会委員長は辻所長が兼任することとし、専門委員を東大教授丸山真男氏等に委嘱した。専門家会議（専門委員会も兼ねる）は昭和四三年二月二三日（金）及び三月一六日（土）に開催した。第一回では、この調査研究全般の事業計画について審議し、第二回では、東大教授石田雄氏（専門委員）が「Civil Rights 及び Freedom の訳語について」と題する報告を行なった。

2 調査研究 (B)

「日本の近代化に対する海外留学生及び御雇外人の貢献」

専門委員会委員長を立教大学講師大久保利謙氏に委嘱し、専門委員を大阪大学助教授梅溪昇氏等に委嘱した。なお外国留学生、御雇外人名簿作成に際し、外務省所蔵文書、総理府所蔵文書中の関係資料のうち、外務省所蔵のものはマイクロフィルム撮影を完了した。なお専門委員会は昭和四三年二月二四日(土)に開催された。

3 調査研究 (C)

「近代日本における翻訳活動に関する調査」

専門委員会委員長は辻所長が兼任し、東大教授前田陽一氏、同下村富士男氏に専門委員を委嘱した。さらに翻訳洋書目録作成の準備に着手したが、昭和四三年一月二七日に開催された専門委員会において討議の結果目録作成に先立って広範囲の打合せ、調査を必要とすることが判明した。

III 連絡及び情報交換

1 内外研究機関及び研究者一覧の作成

「東アジア研究機関及び研究者一覧」(台湾・香港編)を刊行した。

2 季刊「東アジア文化研究」の刊行

本年度は全四冊を Nos 1—4 合併号として刊行した。

季刊誌「東アジア文化研究 Vol VII Nos 1—4」

3 文献抄録の作成

「東アジア関係書目の調査」(定期刊行物編)の編集を継続して行ない、これを完了した。

4 地域外資料目録の作成

国内現存の東アジア関係資料のマイクロを調査する一方、今年度より当センターに寄贈されるユネスコマイクロフィルムユニットによるアジア各国史料マイクロフィルムの整理を行なった。

5 図書資料の購入

当センターの連絡情報交換に基く上記諸事業の出版編集のため、図書資料四一一冊を購入収集した。

IV 出版物の作成

1 研究書・概説書の翻訳出版

来年度出版予定である「史料より見たる明治維新」第一巻の英訳を行なった。

2 非専門読者対象の読物(「東アジア文化研究叢書」)の出版

今年度は「東アジア文化研究叢書」としての下記の図書を刊行した。

シリーズ一二 陳 荆 和 「十六世紀フィリッピンに於ける華僑」

V 研究会・講習会・シンポジウムの開催

1 研究会

本年度は下記の研究会を開催した。

日時 昭和四三年三月二日（土） 午後四時三〇分～五時三〇分

場所 東洋文庫会議室

講師 サン・パウロ大学教授 エウリビデス・シモンイス・デ・パウラ 「ローマ帝国とシルクロード」

同 リカルド・マリオ・ゴンサルヴェス 「ブラジルにおける日本研究の現状」

2 講演会

本年度は広東語講習会を開催した。

期間 昭和四二年七月一〇日～八月三一日

講師 橋本万太郎、余蘊芹、蘇杰

VI 便宜供与

今年度において便宜供与を行なった来日外国人学者は下記の通りである。

Dr. G. William Skinner Professor of Anthropology and Chinese Studies, Stanford University

sity

Dr. Victor M. Fic Professor, Department of Government and Public Administration,

and Executive Secretary of the Institute of Southeast Asia, Nanyang University

Mr. Alexandru Iacobescu Second Secretary, The Embassy of Rumania, Tokyo

Dr. Chien Chang-lau

Director, Library of Academia Sinica

Mr. David D. Buck

Student of Chinese History, Stanford University

Mr. K. Jayatilake

Writer, Ceylon

Mrs. L. Aran

Department of Sociology, The Hebrew University

Dr. Hsü Yün-ts'iao
(許雲樵)

Vice President, Malayan Branch of the Royal Asiatic Society and

Director, The Southeast Asian Research Centre, Singapore

Dr. Ludwig Borngässer

General Director, Staatsbibliothek der Stiftung Preussischer Kulturbesitz, West Germany

Mr. Gerald A. McBeath

Student, Department of Political Science, University of California, Berkeley

Mrs. Nguyen Thi Yen

Teacher of High School, Republic of Vietnam

Mlle Catherine Cadou

Student, Institute of Sociology, University of Tokyo

M. Patrice Jorland

Professor, Section Franco-Japonaise, Collège de l'Étoile du Matin, Tokyo

Mr. Ronald Morse

Fellow, The Centre for Japanese and Korean Studies, University of California

Dr. Ricardo Mario Gonçalves	Professor University, of São Paulo
Dr. Euripedes Simoes de Paula	Professor, University of São Paulo
Mr. and Mrs. Sokichi Ito (伊藤 宗吉)	Vice-President, Japan-Canada Society

附(二) 東洋學術協會

評議員 石田 幹之助 市古 宙三 岩井 大慧 岩 生 成 一 梅 原 末 治
 榎 一 雄 河 野 六 郎 白 鳥 清 末 松 保 和 辻 直 四 郎
 原 田 淑 人 三 上 次 男 山 本 達 郎

編集担当者

宇都木 章 榎 一 雄 神 田 信 夫 北 村 甫 草 野 靖
 佐々木 正 哉 田 中 正 俊 松 村 潤 護 雅 夫 山 口 瑞 鳳
 山 根 幸 夫
 幹 事 柴 田 邦 子

東洋學報第五十卷第一号——四号内容目次
 第五十卷第一号(昭和四十二年六月)

宋代運船業の経営構造……………斯波 義 信
 「管子」書と五行説……………相 原 俊 二
 寧波商人の蠶金輕減請願五紙……………佐々木 正 哉
 山根幸夫著 明代徭役制度の展開……………藤 岡 次 郎

中央研究院近代史研究所編 四国新稿……………佐々木 正 哉

王樹槐著 外人与戊戌変法……………菊 池 貴 晴

安徽省図書館編 安徽文献書目……………山 根 幸 夫

中国の歴史博物館(三)……………菊 池 英 夫

「欽定西域同文志」正誤表

第五十卷第二号(昭和四二年九月)

乾隆安南遠征考(上)……………鈴 木 中 正

辛亥革命前後における安徽省蕪湖県の開墾事業と農民闘争……………小 島 淑 男

徐邈音義考——韻類を中心に……………坂 井 健 一

上海図書館編 徐家滙藏書樓所藏地方志目錄初稿……………山 根 幸 夫

張存武著 光緒卅一年中美工的風潮……………宮 田 玲 子

フアーマー編著(三訂) アラビア音楽史料集成……………渡 辺 宏

クマール著 南インドにおける土地とカースト——一九世紀マドラス管区における農業労働……………辛 島 昇

モリソン文庫蔵東南アジア史料の重要性……………市 川 健 二 郎

第四回「若手アルタイ学・中央アジア研究者集会」……………岡 田 英 弘

第五十卷第三号(昭和四二年十二月)

明末清初江南における地主奴僕関係——家訓にみられるその新展開をめぐって……………細野浩二
オスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」の性格……………小山皓一郎

乾隆安南遠征考（下）……………鈴木中正

康有為のイギリス公使宛書簡二通……………佐々木正哉

張朋園著 梁啓超与清季革命……………菊池貴晴

田山茂著 蒙古法典の研究……………今堀誠二

エベルハルト著 アジアに於ける民族移動と社会的変化……………村松祐次

昭和四二年度春期東洋学講座講演要旨

第五十卷第四号（昭和四三年三月）

蘇毗の領界——rTsan yul a Yan lag gsum pahi ru……………山口瑞鳳

日鮮関係における記録の時代……………長正統

趙万里校輯 元一統志……………斯波義信

ベンダ・ラーキン共編 東南アジア史史料集……………市川健二郎

護雅夫著 古代トルコ民族史研究Ⅰ……………村山七郎

シール著 ムスリムの神学——その起原とキリスト教教父との関連の考察……………後藤晃

昭和四二年度秋期東洋学講座講演要旨

(三) 東洋文庫藏朝鮮善本マイクロフィルム目録(一)

田川孝三編

宮城県立図書館本

青坡集一冊 李陸

整版 中宗四(正徳四)刊

破閑集三卷一冊 高麗・李仁老

整版 成宗二十三(弘治五)刊

樂書二百卷十冊 宋・陳旸

整版 世祖十四(成化四)刊

元詩体要十卷四冊 明・宋緒

乙亥小字 中宗朝(正徳嘉靖間)刊 依明宣徳八年姚世初刊本翻刻

長吟亭遺稿一冊 羅湜

整版 宣祖十一(万曆六)刊

小学諺解六卷二冊(存・卷五・六) 弘文館

庚辰字 宣祖二十(万曆十五)刊

悔堂稿一卷一冊 金宗直

整版 無刊記中宗十五(正徳十五)刊カ

蓬左文庫本

(マイクロフィルム整理番号)

001

003

005

006

010

013

001

家礼考証七卷八冊 曹好益

整版 仁祖二十四年 東萊府刊

第一冊 33、34、第二冊 24丁落

読晦庵論語集解衍義十卷一冊 未詳

鈔本 卷一・二欠（蓬左文庫目錄ニ朝鮮人鈔トスルモ、疑問ノ余地アリ。北平圖書館善本目錄「読晦庵孟子直解衍義」存八卷元刻本アリ）

聴訟提綱不分卷一冊 未詳

鈔本 作は宣祖朝、七年頃カ

菊洞集三卷一冊 尹珩

木活 宣祖二十四年南原府刊

選詩演義二卷二冊 宋・曾原一

庚子字 世宗十六（宣德九）刊

東文選百三十卷六十四冊 成宗命撰

乙亥字 成宗九年（成化十四）刊

統東文選二十二卷十冊 中宗命撰

乙亥字 中宗十四（正德十四）刊 目錄一冊補写

陶隱先生詩集五卷二冊 高麗・李崇仁著 朝鮮下李良編

整版 太宗六（永樂四）刊

詩学蹊經一冊 魚叔權

甲寅字木字乱レ版 明宗十四（嘉靖三十八）刊

設聞瑣錄二卷二冊 曹伸

〇〇三

〇〇七

〇〇八

〇〇八

〇〇九

〇一一

〇一三

〇一七

〇一五

〇一〇

乙亥字 成宗朝刊カ

宛陵梅先生詩選二卷一冊 宋・梅堯臣著 朝鮮安平大君李瑋編

整版 世宗二十九(正統十二) 錦山刊

独谷先生集二卷二冊 成石璘

整版 世祖二(景泰七) 平壤刊

圃隱詩藁二卷附一卷二冊 高麗・鄭夢周

整版 世宗二十一(正統四) 刊

効顰集三卷一冊 明・趙弼撰・王靜証正

整版 中宗初年(正德中期) 刊

真逸遺藁四卷一冊 成侃

整版 世祖十三(成化三) 刊

益齋乱藁十卷四冊 高麗・李齊賢

整版 世宗十四(宣德七) 刊

四雨亭集二卷二冊 李滉

整版 燕山君六(弘治十三) 刊

止々堂集 一冊 金孟性

整版 燕山君七(弘治十四) 刊

易学啓蒙要解四卷二冊 世祖

整版 明宗十五(嘉靖三十九) 寧辺刊

訓世評話二卷一冊 李辺

整版 中宗十三(正德十三) 刊

034

035

036

037

038

039

040

041

042

043

東文粹 金宗直 十卷二冊

整版 中宗朝 全州刊

大明律直解三十卷四冊 高士襲等

整版 明宗元(嘉靖二十五) 公州刊

大觀齋亂稿四卷二冊 沈義

整版 宣祖十(万曆五) 星州刊

養心堂詩集 一冊 趙晟

整版 宣祖元(隆慶二) 刊

睡軒集三卷附一卷二冊 權五福

整版 宣祖十八(万曆十三) 大邱刊

晦齋先生集十卷附一卷四冊 李彥廸

整版 宣祖八(万曆三) 慶州刊 宣祖十一(万曆六) 內賜本

濯纓集三卷一冊 金駟孫

整版 宣祖朝刊

西河先生集六卷二冊 高麗·林椿

整版 宣祖初刊

進修楷範三卷三冊 柳雲

整版 中宗十四(正德十四) 刊

補閑集三卷一冊 高麗·崔滋

整版 成宗二十四(弘治六) 慶州刊

東槎統集二卷後集一卷三冊 蘇世讓

〇四八

〇五三

〇五九

〇六四

〇六六

〇六七

〇六八

〇六九

〇七〇

〇七一

〇七二

整版 明宗十七（嘉靖四十二）刊

徐花潭先生集二卷一冊 徐敬德

整版 明宗末刊

仁川世稿六卷三冊 蔡有鄰

整版 宣祖元（隆慶二）漆原刊

大顛和尚心經解一卷一冊 唐・大顛宝通禪師注

整版 太宗十一（永樂九）高敞文殊寺刊

賢首諸乘法數十一卷一冊 明・行深

整版 燕山君六（弘治十三）伽耶山鳳栖寺刊

運庵和尚語錄一冊 宋・元靖編

整版 太宗朝（永樂頃）刊 覆宋刻

禪源諸詮集都序 唐・宗密 二卷一冊

整版 明宗八（嘉靖三二）覆宋刻

中庸九經衍義十七卷別集十四卷十一冊 李彥迪

整版 宣祖十七年刊

奉先雜儀二卷一冊 李彥迪

整版 宣祖朝刊

求仁錄四卷二冊 李彥迪

整版 宣祖朝刊

四書章句重訂輯釈通義大成二十三冊 元・倪士毅釈・趙訪訂・王逢通義

甲辰字・宣祖三（隆慶四）刊

100

098

092

101

097

096

095

094

093

097

壽親養老新書四卷四冊 元・鄒寧

整版 宣祖十（万曆五）刊

新刊通真子補註王枳和脉訣三卷一冊 晉・王叔和

整版 明宗・宣祖朝（嘉靖万曆初刊）初刊カ

救急方諺解二卷二冊 許俊解カ

整版 宣祖以前刊 諺文古体

入學図說附心氣理篇一冊 權近

整版 明宗二（嘉靖二十六）榮川刊

歷代君臣図像二冊 李荇等

整版 中宗二十一（嘉靖五）刊

二程先生伝道粹言十卷二冊 宋・張栻

整版 明宗十七（嘉靖四十二）刊

紫陽文集十卷十冊 宋・朱熹

整版 中宗朝刊カ

朱子大全百卷・統十一・別集十卷目二卷九十五冊 宋・朱熹

乙亥字中宗三十八年（嘉靖二十二）依天順刊本翻刻

湖陰雜稿八卷八冊 鄭士竜

癸酉字 宣祖初（万曆初）刊

私淑齋集十七卷四冊 姜希孟

甲辰字 成宗十五（成化二十）刊

樂學軌範九卷三冊 成宗命編

1011

1014

1015

1016

1019

1020

1023

1023

1027

1028

1029

整版 成宗二十四（弘治六）刊

梅月堂集二十三卷九冊 金時習

庚辰字 宣祖十六（万曆十一）刊

三峯先生集七卷四冊 鄭道伝

整版 世祖十（成化元）刊

樊川文集四卷外集一卷四冊 唐杜牧著・朝鮮徐居正註

整版 中宗朝末 錦山刊本カ

内訓三卷四冊 昭惠王后（德宗妃）

乙亥字 宣祖六（万曆元）刊

通典二百卷七十五冊 唐・杜佑

乙亥字 明宗十五（嘉靖三十九）刊 依元刻本翻刻

桂州奏議二十一卷十六冊 明・夏言

甲辰字 明宗四（嘉靖二十八） 依明嘉靖十八年刊本翻刻

國朝五礼儀十三卷八冊 成宗命編

整版 明宗七（嘉靖三十一）刊

書伝大文二卷二冊 （刻吐本）

整版 明宗末・宣祖朝刊

御製文集二十卷六冊 明・太祖

乙亥字 明宗元（嘉靖二十五） 依明嘉靖八年刊本翻刻

陳思王集八卷二冊 魏・曹植著 明・李廷相編

甲寅字

110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120

唐詩正音九卷六冊 元・楊士弘

整版 中宗三十七（嘉靖二十二）刊 依明洪武二十三年刊本翻刻

大明一統賦三卷三冊 明・莫旦

乙亥字 中宗三十二（嘉靖一十六）刊

風雅翼選詩補註八卷統編五卷補遺二卷十冊 元・劉履

改鑄甲寅字 明宗八年（嘉靖三十二） 依明正統七年朝鮮刊本翻刻

大明會典序目一卷・百八十卷三十五冊 （正德會典）

丙子字 明宗七（嘉靖三十一）刊

讀杜愚得十八卷目一卷十六冊 明・單復

乙亥字 明宗四（嘉靖二十八） 依明弘治十四年重修刊本翻刻

箋註靖節先生集十卷付一卷二冊 晉・陶潛

庚辰字 宣祖十六（万曆十二） 依明成化五年刊本翻刻

内閣文庫本

周易太文二卷一冊 刻吐本

整版 宣祖朝以前刊

札記淺見錄二十六卷十冊 權近

整版 太宗十八（永樂十六） 濟洲刊

服式一冊 未詳

写 宣祖初（隆慶間）

〇〇四

〇〇三

〇〇二

一三五

〇九一

一三七

一

四

六

論語孟子或問十四卷一冊 明・張元楨

整版 宣祖以前 潭陽刊カ 依弘治七年明刊本翻刻

孟子諺解十四卷（九至十四卷欠）四冊 弘文館校正片

寫本 江戸写但シ諺文古体、精鈔本 依万曆十八年安東郷校内賜本写書

訓蒙字会三卷一冊 崔世珍

整版 明宗十四（嘉靖三十八） 梓原郡刊

太師徽国文公年譜一冊 宋・朱熹 明・葉公回校・孫叔拱補

整版 中宗朝以前 依宣德六年新安歙西仇村黃氏刊本翻刻

歷代要錄二卷一冊 柳希春

整版 宣祖朝（万曆間）刊

西征錄不分卷一冊 世宗命撰

鈔本 江戸写（但二部存ス） 依正德十一年李純刊本写書

国朝征討錄一冊 未詳

鈔本 寬政八年依養安院曲直瀬氏旧藏稿本林家書写

歷代世年歌二卷一冊 權蹈

整版 成宗十九（弘治元） 慶州刊

国朝儒先錄四卷四冊 柳希春

乙亥字 宣祖四（隆慶五）刊

東史纂要八卷八冊 吳澧

整版 光海元（万曆三十七） 慶州刊

己卯錄一冊 金增

五八

五九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五七

五八

整版 宣祖十六（万曆十一）順天府刊

大典統錄・六卷 後統錄六卷三冊

整版

治平要覽百五十卷（卷三十三・三十四・八十六卷欠）百四十七冊 鄭麟趾等

甲辰字 中宗十一（正德十二）刊

詞訟錄二卷二冊 金伯幹

江戶写

詞訟類抄不分卷一冊 未詳

整版 明宗朝末（嘉靖末）刊

忠州急荒切要一冊 安璋

江戶写 依中宗三十六年（嘉靖二十）刊本書写

教閱儀註一冊 兵曹

乙亥字 中宗末（嘉靖間）

朱子增損呂氏鄉約諺解一冊 金安国

乙亥字 中宗十二、三（正德十二・三）刊 昌原刊

朱子書節要十五卷八冊 李滉

整版 宣祖五（隆慶六） 定州刊

朱子文錄三卷統一卷四冊 奇大升

木活 明宗十二（嘉靖三六）刊

許魯齋先生心法一冊 元・許衡撰・明韓士奇校

整版 中宗朝刊（嘉靖間） 依明嘉靖元年韓士奇刊本翻刻

入学図説一冊 權近

整版 仁宗元(嘉靖二十四)刊

三綱行実図三卷三冊(目十行、本文十三行) 楔循等

整版 諺文古体(欄外ノ第一字目全部整本ノ時截断)第三冊末葉裏破レ

二倫行実図一冊 曹伸

整版 諺字古体 中宗十三(正徳十三) 金山郡刊カ

続三綱行実図二卷一冊 申用漑

整版 中宗十(正徳十) 刊

作聖図説一冊 權探

整版 端宗元(景泰四年) 刊

天命図説一冊 鄭之雲

整版 明宗九(嘉靖三十三) 刊

聖学十図一冊 李混

整版 宣祖五(隆慶六) 榮川刊

聖学輯要七卷五冊 李珥

整版 宣祖八(万曆三) 刊

六韜直解六卷六冊 明・劉寅

乙亥字 世祖朝

陣法一卷図一卷一冊 文宗等

整版 成宗二十三年(弘治五) 刊

演機新編三卷三冊 安命老

一〇六

一〇五

一〇四

一〇三

一〇二

一〇一

一〇〇

九六

九六

九六

九五

整版 顯宗元（順治十七）刊

新注無冤錄二卷二冊 元・王與・朝鮮崔致雲等音注

江戶写 依朝鮮正統三年柳義孫序、五年原州刊本書写

農事直說一卷一冊 附衿陽雜錄 世宗命撰・附姜希孟撰 申沅編

江戶写

衿陽雜錄一冊 姜希孟

整版 成宗二十三（弘治五）刊

菁川養花小錄一冊 姜希顔

江戶写 依成宗五（成化十）年刊本書写

鷹鵠方一冊 安平大君李璿

江戶写

（新刊明本）治家節要 明・范立本撰・朱敏校

江戶写 依抱永樂四年積善堂刊本宣德六年大丘翻刻本書写

自警編四卷輯覽四卷九冊 宋・趙善璿編

甲寅字 明宗十年（嘉靖三十四）刊

統蒙求分註四卷四冊 柳希春

整版 宣祖元（隆慶二）慶尚右道兵營刊

儒積質義論二卷一冊

整版 中宗三十二（嘉靖十六）刊

禪宗唯心訣一冊 宋・釈延寿

整版 燕山君六（弘治十三）陝川伽耶山鳳栖寺刊

一〇七

一〇八

一〇九

一一三

一二四

一二六

一二七

一二九

一三三

一三三

御製秘藏詮十卷五冊 宋・太宗

整版 高麗高宗三十四（淳祐六）大藏都監刊

古德禪師真心真說一卷 高麗國普照禪師修心訣一卷 高麗・釈智訥

整版 宣祖三十一（万曆二十六）開元寺重刻

誠初心學人文二冊 高麗・釈智訥

整版 明宗十八（嘉靖四十二）陵城隻峯寺刊

農家集成 朱子勸農文・世宗勸農教文
農事直説・杓陽雜錄 各一卷二冊 申渢編

江戸写 直説依万曆九年内賜本 四時纂要欠

脉訣理玄秘要二冊 宋・劉開著・王和鼎編

整版 明宗二（嘉靖二十六）依嘉靖六刊本洪州翻刻

医説十卷存五冊 宋・張景

甲辰字 明宗十五（嘉靖三十九）刊 内賜本

医林撮要十三卷十三冊 楊札寿

乙亥字 宣祖朝（万曆）刊

六韜直解六卷六冊 明・劉寅

乙亥字 成宗朝末（弘治年）刊カ

外科精要三卷二冊 宋・陳自明

乙亥字 成宗朝末（弘治年）刊カ

崑山顧公医眼論并方一冊 明・顧鼎臣

整版 中宗三十五（嘉靖十九）慶州府刊

永類鈴方二十二卷十二冊 元・李仲南

二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四

一 整版 世宗二十（正統三）依元刊本晋州翻刻

（癸巳新刊）御藥院方十一卷五冊 元・許國楨等

甲辰字 成宗中宗朝刊カ

世醫得効方二十卷二十二冊 元・危亦林

一 整版 世宗七年（洪熙元）依至元五刊本 春州府翻刻

新刊醫家必要不分卷三冊

乙亥字 明宗朝中期 依嘉靖二十七年刊本翻刻

醫方集略七卷七冊 明・郭璧

乙亥字 中宗朝（嘉靖年）刊カ

新編集成牛醫方馬醫方二卷四冊 趙浚等

江戶版 依万曆八年全州刊本翻刻

三元參贊延封書五卷一冊 元・李鵬飛

江戶写 依正統三年（世宗二十）全州刊本書写

答朝鮮醫問一冊 明・王忞遴編

江戶版 享保五年京都中村孫兵衛刊

封養叢書類輯四卷四冊 李昌庭

江戶版 寬文九 依光海十二年（万曆四十七）刊本翻刻

新刊詳明算法二卷二冊 元・賈亨

木活 中宗・明宗朝頃刊カ

新增鷹鷲方一冊 李燭

一 整版 寬文二十年京都二条鶴屋町南輪堂刊 依朝鮮刊本翻刻

一四

一四三

一四二

一四一

一四〇

一三九

一三八

一三七

一三六

一三五

句解南華真經卷十附新添莊子十論一卷 宋・林希逸(附) 李士表

整版 宣祖朝(万曆年) 刊カ 但卷一・六(十七丁) 本文補写

書入多シ 諺文吐ラ文中ニ陰刻ス

莊子膚齋口義十卷十冊 宋・林希逸

整版 室町刊(依拋宋景定二年刊本朝鮮世宗七(洪熙元) 重刊本翻刻)

南華真經十卷十冊 晋・郭象注唐・陸德明音義宋・林希逸口義

整版 中宗朝(嘉靖年) カ 全州刊

周易參同契三卷三冊 宋・朱熹解 黃瑞節附錄 俞琰發揮

整版 宣祖朝以前(万曆年) 刊カ

玉樞經一冊 帶図

整版 宣祖三(隆慶四) 全羅道同福無等山安心寺刊

陶淵明集八卷附一卷一冊 晋・陶潜

整版 中宗十七(嘉靖元) 忠州刊 依明正德李夢陽刊本翻刻

李太白文集 不分卷一冊 唐・李白

整版 覆甲寅字刻本

唐翰林李太白文集・別集六卷 唐・李白

整版 世宗二十九(正統十二) 尙州刊

卷末明板李白文集ニヨリ讀共十七篇ヲ補写綴合ス

杜工部詩范德機批選六卷三冊 元・鄭鼎編

整版 中宗二十三(嘉靖七) 拋弘治十四刊本海州翻刻

纂註分類杜詩二十五卷二十五冊

一四

一四

一四

一四

一四

一五

一五

一五

一五

一五

甲寅字木字乱レ版 中宗十八(嘉靖二)刊カ

李長吉集一冊 唐・李賀

甲辰字 成宗朝(弘治間)刊

唐柳先生集四十三卷別集二卷外集二卷新編外集一卷別錄一卷年譜一卷十二冊 唐・柳宗元 朝鮮崔万里等編

整版 中宗十八(嘉靖二) 掘世宗二十二年甲寅字本翻刻

朱文公校昌黎先生集四十卷外集十卷集伝・遺文各一卷十四冊 唐・韓愈 宋・朱熹校異・李漢編

整版 中宗十八(嘉靖二)刊

風騷軌範前集十六卷・後集二十九卷二十一冊 成俔・權健等

江戸文政六写

伊川擊壤集二十卷集外詩一卷四冊 宋・邵雍

整版 覆元刊本刻本

增刊校正王狀 元集註分類 東坡先生詩二十五卷 東坡紀年録一卷十六冊宋蘇軾・劉辰翁批点

甲寅字 世祖・成宗朝初(天順・成化)刊

蘇詩摘律六卷二冊 明・劉弘集註

整版 中宗朝(正徳・嘉靖)刊カ

后山詩註十二卷二冊 宋・陳師道撰 任淵注(八行)

甲寅字 世祖・成宗初

又 十二卷二冊 彭城陳先生集記 門人魏衍撰 (九行)

整版 中宗・明宗朝間 依明弘治十年刊本刻本

後山先生集 三十卷七冊 宋・陳師道 明・王鴻儒校

甲辰字 成宗・中宗朝刊

一五

一五

一七

一五

一五

一六

一六

一六

一三

山谷詩註內集二十卷外集十七卷別集二卷二十冊 宋・黃庭堅撰 宋・任淵注

甲寅字 世祖・成宗朝初刊カ

晦庵先生五言詩抄一卷文抄七卷(卷一・二欠)五冊 宋・朱熹撰・明・吳訥編

整版 中宗朝(正德嘉靖)刊 依明宣德刊本翻刻

朱子大全百卷統集十一卷別集十卷六十九冊 宋・朱熹撰 朝鮮・柳希春校

整版 宣祖六年(万曆元)刊

歐陽論範二卷二冊 元・歐陽起鳴

甲辰字 成宗朝末 依明成化十一年序刊本翻刻

二樂亭集十五卷附一卷 申用溉

整版 中宗三十六(嘉靖二十)刊

白湖集四卷二冊 林悌

江戸写 (天啓元年光海君十三年申欽序)(底本モ写本ノ如シ)

葛川先生集四卷二冊 林薰

江戸写 依崇禎乙巳顯宗六年宋時烈序刊本

東国莊元集一冊

木活 中宗中期(嘉靖間)刊

十省堂集二卷附一卷 嚴昕

写 依万曆乙酉宣祖十八年定山鼎刊本書写

聯錦詩集二卷二冊 明・夏宏

整版 明宗十五(嘉靖三十九)刊 依明宣德刊本翻刻

牧隱文稿二十卷詩藁三十五卷目三卷二十五冊 高麗・李穡

一六四

一六六

一六七

一七七

一八四

一八三

一八二

一八一

一六九

一七〇

整版 太宗四（永樂二）（權近・李詹序）刊

復齋先生集 附春谷集・判牧公集・寺正公集 二卷二冊 鄭摠

整版 世宗二十八（正統十二）刻 正德十五年重修

秋江集五卷四冊 南孝溫

整版 宣祖十（万曆五）刊

灌圃先生詩集一冊 魚得江撰・吳謙編

整版 明宗十（嘉靖三十七）刊

企齋集十四卷文集三卷別集七卷 申光漢

江戶写

晦齋先生集三卷一冊 李彦迪（十一行）

整版 宣祖初刊

立巖集六卷附一卷二冊 閔齊仁

江戶写 依光海君二年（万曆三十八年）興海郡刊本書写

齊峯集五卷遺集一卷五冊 高敬明

整版 光海君九（万曆四十五）南原刊

芝山先生文集五卷二冊 曹好益

江戶写

蓀谷詩集六卷二冊 李達

木活 光海十（万曆四十六）刊

嶽堅詩集一冊 朴瑞龜

江戶写

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

海峯集三卷一冊 洪命元

江戸写

唐音輯註 唐詩始音輯注一卷・唐詩正音輯注六卷・唐詩遺興輯注七卷 明・張震輯註 楊士弘編

整版 依正統己未四年李繼序刊本翻刻

聖宋名賢
五百家 播芳大全文粹一卷・聖元名賢播芳統集六卷

乙亥字 成宗朝刊力

三韓詩龜鑑三卷一冊 高麗・崔濬批・朝鮮趙云伋編

整版 明宗二十一年(嘉靖四十五)順天重刊

晉陽聯藁二卷一冊 河演等著 河渾編

江戸写 依万曆己酉光海元年刊本書写

尊經閣文庫本

易学図說九卷九冊 張顯光

整版 仁祖二十三(順治二)慶州刊

五先生礼說分類存十一卷(二十卷)十冊 鄭逮

整版 仁祖七(崇禎二)潭陽刊

中庸集略二冊 宋・朱熹

整版 明宗元(嘉靖二十五)依嘉定十年新安刊本翻刻 全州府刊

東国通鑑五十六卷三十三冊 成宗命撰

甲辰字 成宗十五年(成化二十)刊力

一八九

一九〇

一八一

一九五

一九六

二〇二

二〇六

二〇七

二一

第一冊 凡例 二冊 卷一二 二九冊 四九卷
五〇卷 三二冊 卷五四 補写 第三〇冊 卷五一
初敷枚少々破レ

別本卷十 十一

第一冊 卷首・凡例・第二冊 卷三八 甲寅字本
目錄・卷一

標頭音註東国史略十一卷四冊 柳希齡

整版 万曆以前刻本力

彝尊錄二卷附錄二冊 金宗直

整版 燕山君三(弘治十年) 刊力

景賢錄二卷附錄一冊 李楨

整版 宣祖初(隆慶末・万曆初) 刊力

歷代兵要十三卷二十四冊 鄭麟趾

改鑄甲辰字 中宗十三(嘉靖三七)

兵政一冊 申叔舟等

乙亥字 明宗十三(嘉靖三七) 刊

第二丁欠

牧民心鑑二卷一冊 明・朱逢吉

整版 太宗十二(永樂十) 依永樂二年明刊本翻刻 砥平刊

大明律講解三十卷二十六冊

乙亥字 世祖十一(成化元) 刊力

陶靖節集二卷二冊 晋・陶潜 明・何湛之校注

整版 依明正德十三刊本翻刻

稼亭先生文集二十卷附雜錄 高麗・李穀

011
011
011
011
011
011
011
011
011
011
011
011

整版 鮮初刊カ

陽村先生文集四十卷十二冊 權近

整版 世宗初年(永樂末)刊 世祖頃補印

佔畢齋文集・詩集文二卷・詩二十三卷二十二冊 金宗直

整版 仁祖二十七(順治六)重刻

懶齋集不分卷二冊 蔡壽

整版 中宗朝(正德末・嘉靖間)刊カ

澗谿集七卷二冊 俞好仁

整版 中宗朝(右同)刊カ

寓菴稿三卷二冊 洪彥忠

整版 宣祖十一(万曆六)刊

冲庵集四卷五冊 金淨

整版 明宗七(嘉靖三十一)刊

(名公妙選)陸放翁詩集 前集十卷・後集八卷 宋・陸游著 前集 羅椅 後集 劉辰翁編

整版 世祖十一(成化元)刊(目錄 前後共補写)

武陵雜稿七卷・附錄別集六卷 周世鵬

整版 宣祖十四(万曆九)永川郡刊

河西先生集十三卷十三冊 金鱗厚

整版 宣祖元(隆慶二)刊

水色集八卷七冊 許摘著・金世濂評

整版 孝宗九(順治十五)刊

〇五三

〇五四

〇五五

〇五六

〇五七

〇五八

〇六〇

〇六一

〇六二

〇六四

旅軒先生文集十一卷八冊 張顯光

整版 孝宗朝（順治）刊

孝經大義・諺解全一冊 弘文館解

庚辰字 宣祖二十三（萬曆十九）刊 內賜本

養休堂集三卷二冊 盧楨

整版 宣祖十八（萬曆十三）光州刊

唐律広選七卷二冊 李敏求編

整版 仁祖十二（崇禎七）刊

鉄城聊芳集二卷二冊 高麗・李畠・李岡・朝鮮李原

整版 成宗七（成化十二）刊

遊松都錄不分卷一冊 蔡耆之

整版 中宗十年（正德十）刊

高靈世稿詩七卷文集二卷 申澍・申從漢・申沆

整版 明宗四（嘉靖二十八）泰仁刊

宋楊輝算法三卷二冊 宋・楊輝

整版 世祖九（天順八）慶州府刊

蘇齋先生集十卷・內集八卷年譜一卷八冊 盧守慎

整版 顯宗六（康熙四）刊

三綱行実図三冊 俣循

整版 序アリ 諺字近体

二倫行実図二冊 曹伸

063

065

071

077

078

079

083

100

103

107

整版 中宗十三年（正德十三）ヨリ後ノ版本

東人詩話二卷二冊 徐居正

整版 仁祖十七（崇禎十二）慶州刊

相避 未詳

写本 万曆初

備齋叢話十卷五冊 成俔

整版 慶州刊本カ

東國李相國集四十一卷後集十二卷冊 高麗・李奎報

整版 世宗末成宗以前ノ刊カ

牧隱先生文集詩三十五・文二十卷十九冊 高麗・李穡

整版 世宗朝刊カ 目錄中卷數葉欠

訓蒙字會二卷一冊 崔世珍

整版 宣祖朝以前刊

攷事撮要二卷四冊 魚叔權

整版 宣祖十三（万曆十三） 南原刊

心図一冊 周世鵬

整版

兵將說一冊 申叔舟等

乙亥字 明宗十三（嘉靖三十七）刊カ

二養編上六卷 下二卷 曹倬

整版 光海君十二年（万曆四十八）永川郡刊

〇九三

〇四五

〇三九

〇九七

〇九六

一一一

一一〇

一〇八

一〇七

一〇五

性理大全書節要四卷二冊 金正国

整版 依明宗朝（嘉靖間）○○書院刊本翻刻

孝行錄一冊 高麗・權溥著 朝鮮權近註

整版 世宗七（洪熙元）慶州刊カ

〇九四

〇九五

昭和四十三年三月二十五日印刷
昭和四十三年三月三十一日発行

〔非売品〕

財団法人東洋文庫年報

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一号
発行者 榎 一 雄

東京都文京区白山二丁目十二番五号
印刷所 創 文 社

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一号

電話 (942) 〇 一 二 一

発行所 財団法人 東 洋 文 庫

(振替東京六七〇二二番)

